

ジゲンの太刀に後退無し

他意は無い

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ジゲン流を修めた少年が、IS学園で好き勝手に動くお話です
不定期更新

9/22タイトル変更しました

二拾三	二拾二	二拾一	二拾	拾九	拾八	拾七	拾六	拾五	拾四	拾三	拾二	拾一	拾	玖	捌	漆	陸	伍	肆	參	貳	壹	本編
123	116	107	103	97	93	89	84	79	74	69	62	54	50	44	39	32	27	22	17	11	6	1	

目次



本編 壺

一撃必殺は、ロマン溢れるものだろう。そして、そんな一撃必殺には外せば終わり、というようなデメリットがある。

「ふう……………チエストオー……………ツツツ!!!」

ガン!ガン!と木と木が打ち合わされ、欠片が舞う。

因みに、このチエストは男性胸囲やタンス等ではなく、知恵を捨てよ、という言葉が徐々に叫び声として短くなった、という説がある。

更に、これは文学的、あるいは漫画的表現であるため、実際にはキエエエエエー……ツツ!!!といった叫び声だ。

これを猿叫と言い、気合いと共に相手を威圧する意味合いがある。

「ハアアアア……………ツツツ!!!」

一際強く、力を込めて振るわれた一振り。

ズドン、と打ち込まれた瞬間に繊維の引き裂かれるような音と共に、巨木は倒れてしまう。

倒れた木には、不自然な跡があった。

左右が抉れたように凹んでいたのだ。よくよく観察すれば、その表面は毛羽だっており、何かが何度もぶつかり擦れあつた事によるもの、というのが分かるだろう。

そんな木の前に立つのは、一人の少年であつた。

彼の手には、一振りの粗削りな木刀が握られており、その木刀を握つた手からは血が滴っている。

「……………っ、はあ……………まだまだ……………!」

上半身裸であり、袴姿の彼は全身から湯気を立ち上らせ、それでも蒸発しきれないほどの汗をかきながら、新たな木の前へと立った。

右足を前に八相の構え。から、腕を上へとそのまま持ち上げる。

示現流、蜻蛉の構え。

ここで木刀を振るう前に、大きく息を吸い込む。

「……………アアアアアアアアアアアツツツ!!!」

再び始まる、キチガイのような乱打。

ズドドドドツツツ、とまるでマシンガンの斉射のように人の胴ほどもある木は削り取られていってしまふ。

「チエストオー……オー……ツツツ!!!」

一際強く、先程のように木刀が振るわれ、木がへし折れる。同時に木刀も柄より先が砕けてしまった。

「……………次」

砕けた木刀を投げ捨てる、彼は踵を返した。

その先には、先程まで振るっていた木刀と同じく粗削りな木刀が幾本も地面に突き立っている。

その内一振りを抜き取った彼は、再び新たな木の前へと向かう。

「すう……」

息を吸い込み、再び始まるキチガイの乱打。

打ち合う音が木霊した。

／

「おう、島津。聞いたか？」

「なんが？」

「何でも男でIS動かした奴が居るってさ」

「へえ………そんで？それが？」

「んで、全国で他にも居ないか探すんだと」

「あつそ。それよか、そのの鞆とつてくれん？」

朝的一幕。つれないなあ、とか言いながら友人から受け取った自身の鞆から、彼、島津暮人（しまづ くれと）は財布を取り出した。

「ちよつと自販機行つてくる」

「あ、俺のも買つてきてくれ。ポツカ檸檬」

「うーい」

学ランのポケットに黒い財布を戻し込み、暮人は教室を出た。暖房の利いた教室から、すきま風の吹く廊下に出たことにより背筋が震える。

自販機は、校舎の側に建てられた体育館の入り口に設置してある。中学校としては珍しいかもしれないが、夏場は35度を越えることもあり、熱中症対策として校長が設置を決めた次第であった。

自販機のラインナップは、無難にお茶や水など、更にスポーツドリンクに野菜ジュース、コーヒー、カフェオレ。後は季節毎にレモネード等が並ぶ。

「喉の渇きには、冷たいお茶だよな」

暮人は年柄年中冷たいお茶派であった。

500ミリのペットボトルとポツカ檸檬の缶ボトルを買い、踵を返す。

日常だ。学校に行き、家に帰れば剣を振る。

高校に上がっても変わらない——筈だった。

【ついに発見!?二人目の男性操縦者！】

そんな見出しの記事が世界に拡散される事となった。

／

インフィニット・ストラトス。通称IS

宇宙空間における、多機能性マルチパワードスーツであり、見方を変えれば豪華な宇宙服だ。

そして、一番の特徴が女性しか使えないという点。

この結果、世界には女尊男卑の考えが蔓延し、今の社会は形成されていた。

「宇宙服で戦争か……アホくさ」

暮人は、机に頬杖をつくとき空を見上げた。

周りは、女子女子女子女子女子と女子ばかり。

当然か。ここは日本に建てられたISの専門学校、IS学園なのだから。

彼の他に男性と言えば、同じクラスの冷や汗を流し続けているイケ

メンと用務員位か。

四月の春先の日光は眠気を誘う。暮人は大きく欠伸をした。

因みに、春眠暁を覚えず、とよく言うが、これは春の夜は穏やかで眠りやすい事を意味しており、決して昼寝の事ではない。

とはいえ、春は気候が穏やかで昼寝にはもってこいなのも事実。

徐々に彼の瞼は落ちていき――

スパンツ！ 「イッテエ……………」

脳天に加えられた衝撃によって文字通り、叩き起こされた。

いつの間にか寝てしまったらしく、目を開けて周りを確認すると視線が集まっている。

そして、目の前に鬼が居た。

「初日から寝るとは、随分なものだな」

「あ……………春の陽射しって眠くなりますし、しゃあないですよね？」

鬼に対して大きく出たものだ。現に周りも、死ぬわアイツ、的な目で見ている。

「言い分はそれだけか？」

「来たくもない場所にぶちこまれて、真面目にするとでも？」

暮人として、自分が誰かの合格を蹴ってこの場に居ることは分かっている。

だが、自分とて志望校に行くために剣の修行の合間に勉強は続けた。きた。

そして合格したのだ。後は悠々と卒業式を待つだけ。

でありながら、急な調査によって志望校合格も取り消され、更には家から隔離、家族はバラバラ。

挙げ句の果てには、大金積んでモルモットになることを求められたほどだ。

因みにその時は、丁重にもてなして、お帰り願った。

「……………はあ、随分と面倒な奴だ」

「そんなことねえっすよ」

「これ以上は、時間を割けない。さっさと自己紹介しろ」

「ういーっす」

暮人は片手を振ると立ち上がった。

「島津暮人。九州出身で、ここには無理矢理連れてこられましたあ。趣味は剣術を少々。宜しくするかは、未定でーす」

ふざけた物言いであった。

島津暮人という人間は、初日から周囲の視線を一身に集めていた。強面とも言えるが、整った顔立ち。そして常に寝ているような態度。

「ZZZZ……………」

今も頬杖をついたままにのんびりと寝息を立てている。

休み時間であるため、やることは自由ではあるのだが、自堕落が過ぎる姿とも言える。

彼と同じく男性操縦者である織斑一夏も遠巻きから、彼を観察に留めるしかない。

最も、彼は幼馴染みとの再会イベントがあつたのだが。

そんなこんなで、チャイムが鳴った。当然ながら、寝ている暮人は反応できない。

入室してきた教師陣。その内千冬は、彼を見咎めた。

ツカツカと歩み寄ると、その手の出席簿を振り上げ、振り下ろす。ズパンツ!!「……………んあ?」

結構痛々しい音がしたのだが、彼は大したダメージを受けていないらしい。

まるで揺すられて起こされたかのようなゆっくりとした起き方であり、大きな欠伸をかます。

「居眠りも大概にしておけよ」

「うー」

反省のはの字も見えない態度。

だが、全く興味もないようなこの態度も仕方がないとも言える。人間誰しも、興味が無いモノに精力的に動くことは難しいのだ。

挨拶が終われば、再び頬杖について彼は目を閉じる。

やはり千冬に叩かれるのだが、彼は今度は目覚めなかった。

結構な強さで叩いているというのに、ノーダメージ。それどころか、眠りからも覚めないなど相当だろう。

この理由は単純に、彼が痛みに馴れていることに原因があつた。

彼の実家は、剣術狂い。それこそ時代錯誤等鼻で嗤うようなそんな家なのだ。

剣に始まり、剣に終わる。

そう言われるほどの筋金入り。

そして、剣の修行は人権を無視したような程に苛烈であり、更に激烈であった。

まず、確実に全身の骨は三度は折られる。場所によっては二桁など軽く至るほど。

筋肉や筋が断裂するのは当たり前。その過程で二度と剣どころか手が動かなくなるものすらいるほどだ。

そしてその結果。痛みに対して、鈍感の域を通り越したような彼が出来上がった。

三度叩かれ、三度無視した暮人。

流石に今回は、千冬が根負けした。ため息をつくくと、授業を進めるように副担任の山田真耶へと進言する。

彼女は別に体罰信奉者ではない。だが、どちらかと言うと気が短く、手が出やすいのは確かだ。

しかし、ここまで無視されるのは初めての経験。対処方法が分からないと感じていた。

「……………」

真耶の授業を教室後方で確認していた千冬は、頭のなかで今も惰眠を貪る暮人の情報を確認していた。

IS学園に入学する者達は、最低限身元が洗われている。

特に今年は、二人の男性操縦者と一人の天災の妹が入学しているため他年度と比べてより一層念入りに、だ。

得られた彼の情報。剣術一家の嫡男であり、幼少期より剣を振ってきた。

その実力は高く、今回の一件が無ければこのまま当主の座につくことは確実だった。

剣術に対する理解のある学校を探し、特待生として入学も決めていた。

だが、それも適性発覚により頓挫。

そして、今では露骨にモチベーションを落としており、今回は教室に来ているが、何れここにも来なくなるだろうというのが千冬の読みであった。

分からなくもない。努力をしてきた上で、その上で横槍を入れられ踏みにじられたようなものなのだ。

とはいえ、それは彼の入学の折りに入試成績の最下位とその一つ上の成績であった少女たちも同じような事なのだが。

ままならないものだ、と弟の頭を叩きながらそんなことを思う千冬であった。

／

「――闘ですわ!!」

「……………んあ?」

眠りには、波がある。ふとした瞬間に意識が浮かび上がり、その夕イミングで大声を掛けられれば誰でも違和感で目を覚ますだろう。

例に漏れず、暮人も目を覚ましたようだ。薄ぼんやりと目を開けた。

寝起きでありながら直ぐに覚醒した彼は、教室の空気が険悪であることに気づく。

原因は、教室後方。金髪の少女にある。

「なあ、どしたんだ?」

「!し、島津くん!?えっと、オルコットさんと織斑君が――」
隣の女子に声をかけ経緯について尋ねた暮人は聞き終えると同時にため息をついた。

「……………アホくさ」

周りのミーハー具合と貴族のプライド、一夏の愛国心。

そのどれもが、興味を引かない。

ドライな反応だが現代の日本人は、自身に影響が無ければこんなものだ。

再び眠ろうと、目をつぶり、

「貴方もですわ！」

掛けられた大声によって飛び立てない。

「あ？」

「初日から寝てばかりではありませんか！志が低いのではなくて？」

何故だか矛先が自分へと向けられ、暮人は若干首を捻って後ろを見る。

「まあ、所詮は男ということですからね。志が低くて信念もない。なぜ、貴方のような方がこの場にいるのか理解に苦しみますわ」

「……………」

「何か言ったらどうなんです？最も言い返す言葉も——」

「お前の髪の毛、ドリルみたいだな」

瞬間、空気が凍った。

周りは言っちゃったよ、的な雰囲気だ。暮人と言われた側のセシリア・オルコットを交互にみやる。

「な、なななな……………」

「ついでに言うと、宇宙服で決闘とかバカだな、程度しか思ってねえさ」

これは、認識の差異だ。

確かにISは既存の兵器を無力化してしまうほどの性能を持っている。

しかし、それら機能は宇宙空間における安全性を確保するためのものでしかない。

全方位を目視可能なハイパーセンサーは、遠距離並びに死角を無くし、スペースデブリ等に対応するため。

シールドエネルギーや絶対防御は、搭乗者の身を守るため。

兵装の類いは、元々宇宙空間の危険を排除するためだ。

断じて戦争するためでも、決闘するためでもない。

「貴方ねえ……………」

「なんだ？」

「ISは、兵器です！戦うものではなくて？」

「いいや。そのアプローチが間違ってるんだろ。ISは元々宇宙服だ。そうやって学会に上げられて、誰も見向きもしなかったからこうなってるんじゃないか」

意外や意外、彼は中々に調べているらしい。

博学、というわけでもないがよく回る彼の口に教室中が注目していた。

膠着状態、そこでチャイムが鳴った。

暮人は立ち上がると、スタスタと廊下へと向かう。

「ま、待ちなさい！まだ、話は――」

「アンタがそうでも、俺は終わった」

そのまま誰の制止も聞かずに、彼は教室を出て行ってしまった。

参

IS学園の敷地は広大だ。

それこそ、敷地の端など基本的に誰も近寄らないような場所もある。

その一つ、木立の中に暮人の姿はあった。

大きな木の根本で、地面より顔をだした根っこの一部を枕に寝息を立てているのだ。

時刻は昼休みを終えて、五時間目に入ったばかりといったところ。完全なサボりである。

正直なところ、剣を振りたい所なのだが、振るえばその音がこちら一帯に響く。

何より、ここはIS学園。私有地の森ではないのだ。木を潰すわけにはいかない。

その結果、睡眠と言う暇潰しを行う暮人。そんな彼を監視するものがいた。

彼女は、水色の髪を揺らし口元を扇子で隠すと木に背を預けている。

「……………初日からサボるなんて、とんだ不良だわ」

少女は、一度扇子を閉じると、再び開く。そこには『驚愕』と達筆に書かれていた。

そこには、単純な不良としての驚きだけではなく、これ以上彼に近付けない事も含まれていた。

一度、距離を見誤って踏み込みすぎた際に圧を掛けられて以来この距離だ。

悪意に似た感情を持っていたせいだろう。

それは下心。あわよくば、彼の実家とのパイプを作ればと考えていた。

彼の実家は、前述した通り剣術一家。時代錯誤の化け物一家だ。

雲耀という、一種の極致を目指し続け、その過程で過去には死人すら出している。

だが、その実力は確かだ。何せ途中でドロップアウトした者ですら、生半可な軍人を蹂躪するほどに強い。

「でも、接触しなきゃいけないのよねえ。お上の犬も楽しやないわ」
少女は、深々とため息をついた。

年若くとも、彼女は対暗部用の暗部の長を務めている。更にロシアの国家代表だ。

彼女こそ、生徒会長を務める更識楯無その人である。

「兎に角、どうしようかしら。悔しいけど、武力じゃ負けてるのよね。となると——」

「甘いもんでも食わせてくれよ」

「甘いもの………洋菓子と和菓子はどっちが好きなのかしら」

「意外に可愛いもの食うとかよく言われるぞ」

「そうなの………あら？」

はて、自分は誰と会話しているのだろうか。

振り向けば片手を挙げた目付きの悪い黒髪の少年。

「別に俺は、邪険にしてる訳じゃない。お茶の御誘いぐらい受けてやるや」

「………そう。因みに、何が食べたいのかしら？」

「苺のパンケーキを所望する」

「………本当に可愛いもの食べるわね」

／

IS学園生徒会。生徒会長、書記、会計の3人が在籍する。

「よく食べるわねえ………」

「旨いからな。お代わり」

「こちらをどうぞ」

部屋の中には、甘い匂いが立ち込めている。

楯無が呆れるほどに、暮人は何枚ものイチゴソースとマスカルポーネクリームに乗ったパンケーキを平らげていた。

それらを焼くのは、眼鏡の女生徒。楯無の付人である布仏虚であ

る。

基本的に大抵のことは、そつなくこなす彼女。スイーツ作りの腕も一流に近い。

「ふうー……………ご馳走さま」

ゲップ、と大きく息を吐いて温くなった紅茶で残りカスを喉奥へと流し込んだ暮人は人心地ついたと言わんばかりに腹を撫でる。

かれこれ二桁は軽く食べただろうか。昼を抜いていることを加味しても相当な量だ。

虚がパンケーキを焼いていたホットプレートや盛り付けた皿などをワゴンに乗せて退出したところで、二人は向かい合った。

「改めて、自己紹介から始めましょうか」

「島津暮人。九州生まれ。趣味剣術」

「早いわよ!?!……………はあ、更識楯無。学園で生徒会長を務めてるわ」

「へえー」

「反応薄いわね」

「入学式で演説してたろ」

「あ、そう」

短いやり取りだ。ここで二人は、紅茶に手を出して会話も切れた。

そして、楯無は相手のやりにくさを感じる。

何と言うか、独特なのだ。

バカではない。だが、天才でもない。理路整然とした策士タイプでもなく、言うなれば本能型とでも表すべきか。

もつと言うならば、本能寄りの理性。つまりはハイブリッド。情報収集は怠らず、その上で事前情報に依存しない。

最も、この楯無の分析は深読みが過ぎるというものなのだが。

単に暮人は、目で見て、耳で聞いて、記憶した事を発しているだけ。「それじゃあ、単刀直入に言うわね。生徒会に入ってくれないかしら?」

「断る」

「……………入ってくれないかしら?」

「断る」

勧誘は、速攻で断られてしまった。

いや、初めから断られる可能性はあったのだ。実際に、楯無も想定はしていた。

だが、ここまで何の迷いもなく断られると流石に気分が悪い。

「理由を、聞いてもいいかしら？」

「学園では部活に入るのが決まりなんだろう？俺は、入りたいところがあるんでな」

「因みに聞くけど、何部？」

「剣道部。剣を振れる場所が欲しいからな」

暮人としては、巻藁さえあればいい。木刀は実家から定期的に送られてくるだろうし、立ち木打ちに関しては、巻藁で代用する。

「生徒会でも、振れるわよ？」

「生憎と、俺は率いたり指示飛ばしたりする仕事は苦手なんぞな」

他の誘えよ、と暮人は笑む。

柔和な笑みにも見えるが、その実、相手の言葉じゃ揺らがないという意思が垣間見える。

「それで？それだけが理由なのか？」

「何を——」

「態々授業中で人払いした上で俺のところに来たんだ。何か有ったんだろ？」

（本ツ当にやりにくいわね。こっちは、貴方のキャラが掴めないっていうのに）「……………貴方の実家に関係することよ」

「俺ん家？」

「ええ。知らないかしら？裏では貴方の家を出た人は人気なのよ？」

「へえー」

「聞いたわりには、興味がないのね」

「まあな。剣つてのは、人それぞれなんだ。自分の剣が無い剣士つてのは、二流止まり。家を出たってことは、一流になったか、逃げたかのどっちかだし」

事も無げ。

というのも、彼の家には、秘伝がなかった。

基礎は教える。だが、その先は自分で至らねばならないのだ。

そして、落伍者には何の罰もない。

故に、彼の家に残るのは、本物の剣術バカのみ。

「で？」

「……………私達の飼い主が、親交を復活させてほしいみたいなのよ」
「復活、ねえ。勝手にそっちが離れたんじゃなかったか？」

「だって、貴方達勝手に動きすぎるんだもの。剣一本で一個師団に挑むなんて無茶無謀よ」

「？俺達には、それしか無いんだから当たり前だろ」

「だからって、作戦も何もかも。それどころか、防弾チョッキの一つも着ないなんておかしいし、隠密性に欠けるわ」

「そりゃ、そっちは暗殺者だがこっちは剣士だ。土俵が違う。それに、俺たちには防御も後退も無いんだ。真っ直ぐ行ってぶった斬る、それだけだ」

脳筋戦法だ。だが、これこそが軍も恐れた気狂い剣法の真骨頂。

「……………じゃあ、協力してくれないのかしら？」

「協力も何も、俺達は適当に動くだけだ。そっちが勝手に依頼して、暴られる状況でも作ればいいだろ。それに、今回は俺がISを動かしたから、話を持ちかけたんだろ？」

「気付くわよね。ええ、そうよ」

「面と向かってモルモットに成ってくれなんて言われたのは、初めてだったな」

カラカラと笑う彼だが、その話を持ち込んだ政府の人間は笑っては
いられない。

何故なら、その人は精神の均衡を崩して病院送りとなったからだ。

四方八方から殺気を飛ばされて、囲まれればそうなるのも無理はない。

「ホント、厄介だわ、貴方」

「本人の前でそれを言うか？」

「良いじゃない。貴方は気にしないでしょ」

「まあ、な」

肆

放課後。生徒会室で午後の授業もブツチした暮人の姿は剣道場に
あった。

放課後になると直ぐにここまで来た為に、彼は制服姿だ。

「防具は本当に要らないんだな？」

「……………要らねえ」

制服の上着を脱ぎ、黒のタンクトップ姿となった暮人の手には、一
振りの竹刀。

彼と相對するのは、剣道の防具一式を纏い竹刀を中段に構えた篠ノ
之箒。

更に、剣道場の端には部員の他にも多数の生徒達が居た。

事の始まりは、数分前へと遡る。

「道場なんて、久し振りだな」

近代的な校舎のなかに、和風は浮く。鼻を擽る木の香りを嗅ぎなが
ら、暮人は剣道場前へとやって来ていた。

外履きに靴下を突っ込み、上着を脱ぐ。

「失礼、この剣道場の責任者はどこっすかね」

突然の来訪者に沸き立つ剣道場。そして、少女達の視線は、彼の肉
体へと吸い寄せられていた。

礼儀正しく、折り目正しく、ピシリと背筋を伸ばした彼の全身には、
服の上からは分からない、まるでギリシヤの彫刻のようなミチミチと
皮膚を突き破らんばかりに詰め込まれた筋肉があったのだ。

「あ、えっと……………私、だけど」

「これから、剣道場の端を借りたいんすけど。良いっすかね？」

「えっと、島津君、だよね？剣道するの？」

「いや、剣術っすね。それに、家の方から誰かとの鍛練は向かないって
言われたんで」

暮人が思い出すのは、父や祖父母、親戚などから向けられた気狂いを見るかのような目。

無論、そんな目を向ける彼らも世間一般からすれば十分に剣狂いなのだが。

「あ、これ入部届けっす」

比較的常識をわきまえた彼は、入部届けを責任者である上級生へと差し出す。

そして、彼は一礼すると近くの壁に掛かっていた木刀を周りに断りを入れて手に取った。

そのまま赴くのは、一本の丸太の立ち木。

「ふうー……………」

周りが注目するなかで、集中する暮人は一人であった。

大きく息を吐き出すに併せて、彼の視界は周りの余分な情報をカットしていき、思考は剣の一点に絞られていく。

「……………チエストオー……ツツツ!!!」

蜻蛉の構えより放たれた振り下ろし。まるで雷でも落ちたかのような衝撃と音が辺りに木霊する。

そして、それは一度だけではない。

振り下ろす速度もそうだが、それ以上に剣を引き、元の体勢に戻る速度も尋常ではないのだ。

立ち木は瞬く間に痩せ干そっていき、同時に木刀にも大きくヒビが刻まれる。

「ハア………ツツ!!!」

一際強く、気迫を発し踏み込み、振り下ろす。

木刀が砕け、立ち木も真横からへし折れた。

「やっべ、やり過ぎた」

我に返った暮人は、刀身の砕けた木刀を眺めて頭を搔く。

隔離を受けてから久方ぶりの打ち込みであった為に、どうやら加減が甘かったらしい。

謝罪をしようと振り向く彼だったが、周りは其れ処ではない。

木刀自体も脆いものではない。それはへし折られた立ち木も同じ

ことだ。

それをたつた一度の打ち込みだけでへし折るまで持つていった。端的に言つて化け物過ぎる。

「すんません。少し手加減が鈍つてましてね」

「……………あ、うん」

ヘハリと笑つた彼に、責任者の先輩は気の無い返事しか返せない。同時に、彼ほどの使い手がこの部に入ったことに今年の波乱を嗅ぎとる。

もう一人、持て余した期待の新人が居るからだ。

最も、彼と比べればまだ人間業なのだ。

その後、砕けた木刀と折れた丸太を暮人が担ぎ上げると同時に、新たな部員がやつて来る。

彼女こそ、中学剣道の全国大会にて圧倒的な実力を持つて優勝した、篠ノ之箒その人である。

彼女から見れば、一日サボつていた男が道場に無理矢理押し入つて暴れたように見える。

「お前、何をやっている」

「鍛練」

「立ち木をへし折るのが鍛練か」

「ここ最近、振れてなかつたからな。加減ミスつたわ」

ヘラヘラしている暮人の態度は、真面目な箒にはふざけているようにしか見えない。

「……………」

既に胴着へと着替えていた彼女は、手早く防具を着けていく。そして、竹刀を暮人へと突き付けた。

「剣術をやっていると、言つていたな。ならば立ち合つてもらおうか」
流石にそれは無謀だ。少なくとも周りは、止めようと動く。

そこを暮人は制した。

「それは、手合わせか？それとも、死合か？」

「前者だ」

「そうか」

箒の言葉に暮人は、頷いた。そして、丸太を下ろし、木刀の欠片をその上に置くと、竹刀が置いてある場所へと向かう。

適当に一振り抜き出すと二、三度振って肩に担いだ。

「なら、やろうか」

そして、場面は冒頭へと戻る。

／

中段に構えた箒と竹刀を肩に担いだ状態の暮人。

別段、彼は舐めている訳ではない。

ただ、一定以上の使い手ともなれば自然と力の差を理解するというものだ。

剣の修行を積んできた箒と剣の苦行を積んできた暮人。

一文字違えば中身も違う。

箒の剣の腕も相当なのだが、残念ながらその域にまでは達していない。

だからこそ、目の前の相手が構えないことが腹立たしい。

「……………行くぞ!!」

もとより、寝てばかりだった彼には良い印象を抱けていなかった箒だ。

竹刀を振り上げながら、一気に距離を詰めていく。

面打ち。これまで何度も練習を重ね、更に全国大会でも、一度も防がれることのなかった鋭い一手。

だが、

「カツ———!?!」

音が遅れて聞こえ、箒は左斜め後方へと吹き飛ばされていた。

勢いよく流れていく景色。そのなかで、彼女は確かに見た。

(片手、だと……………!?)

視線の先、右手を左から右へと薙ぎ払った体勢の暮人がいた。

何の事はない。突っ込んできた箒に対して彼が後出しで竹刀を振る、勝った、それだけのことだ。

膂力、技量、鍛練量。全ての桁が違う。

この一合で格付けは決した。

吹き飛ばされながらも、何とか両足で踏ん張って止まる筈。だが、体が止まると同時に膝について崩れ落ちる。

胴の防具を挟んでも相当な衝撃だった。

「終わりか？」

「……………ぐっ……………まだ、だ！」

立ち上がる筈。何度もええずいているが、その切っ先は確りと暮人へと向けられている。

その面の下から覗く瞳には、先程までの侮りと、彼女自身も気付かなかった傲りが消えていた。

代わりに宿るのは、純粹な闘志。高みに挑む一人の剣士がそこに居た。

「……………」

暮人も応える様に、構えるのは蜻蛉。同時に全身から押し潰さんばかりの圧力が放出される。

「……………ッ！」

厚く高い壁。一瞬怯んだ筈だったが、無意識に下がろうとした足を無理矢理前へと踏み出し、駆け出した。

そして――

伍

気がつけば、彼は剣を振るっていた。

朝も昼も夜も。食事と睡眠の時間を除けば、ただひたすらに鍛練の繰り返し。

最初は、出来上がっていない肉体に配慮していたが、それも一年からずいぶん経ち、後は修羅道だ。

辛くなかったと言えば嘘になる。殺される、と思ったことすらあった。

だが、それ以上に本能が剣を手放さない。遺伝子レベルにまで刻まれた剣術バカの本能が理性も、生存本能すらも叩きのめして剣を振らせたのだ。

手には、血マメが出来ては潰れを繰り返し、酷いときには、ペロリと皮が剥けて血が流れた事もある。

肩回りや、背筋なども何度も切れては治りを繰り返しており、数カ月を渡って痛みが消えなかった事もある。

これはほんの一例だ。他にも、腕の振りすぎで骨が折れたり、爪が割れて剥がれたこともあった。

それでも、振るって振るって、振るい続けて、気づけば彼は次期当主を周囲から望まれるほどとなっていた。

勿論、やつかみもあった。だが、彼の鍛練を見た者達は揃って口をつぐんだのだ。

正確には、つぐむしかなかった、と言うべきか。

それだけ、凄惨な光景がそこにはあった。

／

「……んで、これがその時に皮が剥けた痕だな」

「い、痛々しいものをみせるな！ 私の手まで痛くなるではないか！」

寮へと向かう道を並んで歩く、暮人と箒。

剣の手合わせを行っていた二人だったが、最後には鍛練の様相で終

わりを告げた。

因みに内容は、暮人が剣を振るい反応できれば威力を抑え、出来なければ支障がない程度の威力で叩かれるというもの。

普通は、逆で反応できれば叩き、出来なければ叩かないだろう。

しかしそれは、暮人の家から言わせれば生温い。

というのも、正面から、それも剣道の面によつて狭まった視界でも見える範囲で攻撃を行うことが大前提であり、それで反応できないというのは単純に注意力と集中力が足りていないということだからだ。

彼の実家では、剣の学習において常に痛みが伴っていた。

昔から体罰などが信奉されるのは、人間の学習能力において痛みとというのが大きな比重を持っているから。

痛いことは、誰しも嫌だ。そして嫌なことは基本的に人間は忘れない。

更に痛みは、そのまま体の不調に繋がる。

不調は誰しも嫌であり、そこで体は覚えるのだ。

つまりは、反応できれば手傷は負わない。その為に視野を広く持とうとする。

まあ、これは第一段階。出来て当然であり、この後は、反応し防御する事、受け流すこと、後の先をとること、等がある。

最も、暮人はそれらを無視して先の先どころか、後だししても先に攻撃を当てる事が可能な臂力と技量を身に付けるに至ったわけだが。

そんなスパルタな手合わせが終わり、はからずも二人揃って帰ることになったのだ。因みに、暮人は途中で会った山田先生から寮の鍵とその他の説明を受けていた。

「島津、剣の振りなのだが——」

「俺も大分感覚派なんだがなあ——」

寮へと向かう道すがら、二人の話題は専ら剣に関する事であった。

基本は、箒が質問し、暮人が応えるというもの。

「だから、そこはギユツとバーンだ」

「成る程、ギユツとバーンか」

「んで、そこはググツとなって、ドンツだな」

「ふむふむ」

ただ、感覚派の会話は要領を得ないにも程がある。擬音のオンパレードであり、身振り手振りもないために、第三者が相当な感覚派でなければ会話の内容を理解することは出来ないだろう。

「——つと、着いたか」

「む？ああ、もう着いたのか」

いつの間にか、二人は寮の前へとやって来ていた。

箒にしては珍しく、他人との関わりを楽しんでいるのか、無意識の内にその眩きには残念さが混じっていた。

彼女は、天災の妹だ。それ故に、全国津々浦々、様々な場所を盪回しにされてきた。

そんな状態では、彼女も擦りきれるといふもの。

どうせ直ぐに会えなくなるのだから、と箒は人との繋がりを最小限に生きてきた。

唯一の心の支えは、初恋の相手と幼少期より振るってきた剣のみ。だが、それも中学最後の大会で後者が折れてしまった。

今でも夢に見る、相手の怯えたような表情。同時に悟った。自分は、憂き晴らしに剣を振り回していた。暴力を振るっていただけなのだ。

どうしようもなかった。IS学園に入れられてからも、剣を振るってしてみたがどうしても雑念が払えなかった。

そして、今日彼と出会う。

千冬のような剛剣だが、彼女以上に苛烈な炎のような剣。

「……………なあ、島津」

「あ？何だよ」

「お前は、自分の剣をどう思っているのだ？」

「どうって……………急に何だよ」

「私は——」

そこで彼女が語ったのは、全国大会での顛末であった。

箒の話を最後まで聞いた暮人は頭を搔く。

「それで？俺の剣への認識を聞きたいってのか？」

「ああ」

「ふむ……………」

考え込む暮人。そして、右人指し指をたてた。

「鉈の重さに、剃刀の切れ味」

次に中指を立てる。

「折れず、曲がらず、よく斬れる」

暮人はピースサインを箒へと突き付けた。

「刀の謳い文句だ。どっちもその根底にあるのは、人を斬るってことだ」

指を戻して再び人指し指を立てた暮人は、空中に何度もええうて円を描きながら理を語る。

「剣は、凶器で。その剣を扱う剣術は殺人術。活人剣とかもあるが、これは殺人剣ありきの理論だしな」

「……………」

「だから、俺は暴力を肯定する。剣術自体が殺すための技術で、殺人は究極的な暴力じゃねえか」

「島津は、他人を傷付けるのが怖くはない、のか？」

「全く。というより、俺とお前じゃ前提が違うだろ」

困ったように小首を傾げる箒に対して、暮人はニヒルに笑う。

「俺は、俺のために剣を振るう。生憎、他人の思いを背負ったりして重くしなきゃならないほど、俺の剣は軽くないつもりなんぞな」

暮人からすれば、誰かを守ったりする感情を理解することは可能だ。しかし、共感は出来ない。

結局、最後にものを言うのは自分の力。

何より、彼には自負があった。

自分の剣は、誰よりも重い、という自負だ。

「ま、そんなのは個人次第だろうがな」

ヘラリと笑うと、彼は一足先に寮へと入っていった。

その背を見送った箒は、揺れる。

自分には、彼処までの自負をもって剣を振るってきただろうか、と。
「私の剣は……………」

答えは、まだ出ない。

陸

IS学園は、その扱う分野からか世界各地から入学してくる。そんな彼女達の為に食堂には多種多様な料理が出されるようになっていた。

「……………ガツガツ」

右手にスプーンを持ち、左手でピザを切り分け口に運ぶ。

四人がけのテーブル席を一人で占拠し、所狭しと料理を置いた暮人は、片っ端から夕食を平らげている所であった。

彼を遠巻きに眺める者達は、挙つてその健啖家ぶりにヒソヒソと言葉を交わす。

元々、女子校の様相を呈していたのだ。男が浮くのも当たり前というもの。

何より、彼の雰囲気と食べる量は異質すぎた。

大皿のカレーライスに、Lサイズピザ。ボウル山盛りのグリーンサラダに各種フライの盛り合わせ。

明らかに一人で完食するには多すぎる量だろう。

それが、まるで排水溝に流す水のように目減りしていくのは圧巻の一言。

十分後には、完全に料理達は消え去りスツカラカンの皿やボウルだけがその場には残っていた。

だが、これで終わりではない。暮人は席をたつと食器を重ねてカウンターへと返し、再び何やら注文し始めるではないか。

そして、彼が受け取ったモノにざわめきが加速する。

「うん、旨い。やっぱり、甘味は至高だな」

柄の長く、先端が小ぶりなスプーンを扱い、暮人は舌鼓を打つ。

彼が食べているのは、食堂でも有数の大きな大きなイチゴパフェ。その傍らには、ワンホールのイチゴのタルトが鎮座していた。

甘味。それも圧倒的な甘味だ。女子が食べればその後の食事制限で四苦八苦することになるだろう。そして、血糖値がマツハだ。

生徒会室での一件のように、彼は甘味を好んでいる。

健啖家であり、更に甘党。

普通ならばぶくぶく太ってコブタ一直線なのかもしれないが、その摂取カロリーを上回るレベルの消費量を誇る筋肉があるため無問題。ある意味では、理想的な体だろう。代償として、肉体をぶつ壊されるが。

「ふう、うちそうさま」

なるべく味わいながら、パフェとタルトを食べ終え、お茶を飲み干す。

恐らくこの一度で、成人男性が摂取するカロリー数日分を彼は食い終わった事になるだろう。

その後、楊枝を啜えた暮人は食器を片して食堂を出た。

彼の足は、真つ直ぐに自室へと向かう。寮の部屋割りは基本的に二人で一部屋なのだが、彼は一人部屋であった。

単純に、ハニトラが効果がないと判断された事と、彼の実家より送られてくる物騒な品々による怪我人を出さないためだ。

「ん？」

実家では基本的にかぎを使わない彼は、ドアノブを捻って、開かないことに首をかしげた。

教師陣の考えは兎も角として、彼は盗られて困るものなど特にないと思っっている。

唯一挙げるならば、今彼の尻ポケットに入っている財布ぐらい。スマホなどに関しては、元々持ち合わせてはいなかった。

元より鍵など閉める気が無いために、鍵は部屋の中だ。となると、閉め出された形となる。

扉を壊すことも考えたが、剣以外は比較的マトモである彼はその後を考え、寮監の部屋へと向かうべく踵を返した。

「意外。問答無用で壊しちゃうかと思っただけど」

暮人が扉の前から去って少し経った頃、扉が開くと中からひよっこり顔を出す楯無。

今回の一件は彼女の悪巫山戯によるもの。

仮に扉を破ってくれば、そのままからかいながら、鍵を閉めること

をそれとなく促すつもりであった。

だが、結果としては極々普通の人間と同じ反応をして、アツサリと寮監室へと向かう。

チグハグな印象を与える。

生徒会室で己を翻弄した姿。剣道場で見せた剣士としての姿。食堂で見せた健啖家としての姿。

特に二番目は苛烈であった。

だが、それも箒との立ち合いまで。彼女と剣を交えると、その覇気は質を変えて炎は水へと変わっていた。

「面白いわねえ」

楯無は、笑みを浮かべ部屋を出ると鍵を閉め、ドアノブへと引っ掛けその場を去っていく。

／

朝。未だに、朝日も昇らない時間帯。グラウンドの端では、風を切る音が響いていた。

「4996……………4997……………4998……………」

モウモウと上半身より蒸気を立ち上らせ、黒の袴に着物をはだけさせた姿の暮人がそこにいた。

彼の手には、身の丈以上の丸太に鋼の持ち手を付けたような武骨な代物。

これは、暮人専用の素振り用の棒。彼の実家では、個人それぞれに専用の素振り棒が存在していた。

例えば、父ならば小振りな木刀、母ならば物干し竿とも呼べるほどに長いモノ。

その他にも、形状は様々。中には、異国の剣を象った物もあった。そして、暮人が振るう物は、間違いなく歴代でも最重量の代物。そもそも、並みの人間では持ち上げることすら不可能だ。

況してや、それを打ち込みの要領と速度で振るっているのだから、化け物さが滲み出る。

「5000……1……2……」

5000回の素振りを終え、今度は右手と左手の位置を入れ換えて、踏み込みの足を変えながら素振りを行う。

合計一万回の踏み込み素振り。

「凄まじいな」

「……………5000……何か用か？」

素振り棒を地面に突き立て、暮人は振り返る。

そこに居たのは、白ジャージ姿の織斑千冬。

胸の下で腕を組んだ彼女は、ジツと彼の握っていた素振り棒を見ていた。

彼女も世界最強を冠する存在だ。特にその馬力はかなりのモノ。

ではあるが、目の前の少年には負けているだろうと感じていた。

「いや、流星は島津の家だと思つてな」

「……………？」

「一度だけだが、お前の実家で学んだ剣士と剣を交えたことがある。最も、途中で逃げ出したらしいがな」

「へえー」

IS学園に籍を置く者からすれば垂涎の状態なのだが、暮人は気の無い返事。

彼からすれば、ISでの世界最強など宇宙服で喧嘩している様にか思えない。

確かに派手だ。世界的にも大々的に放映されるISバトルは手に汗握るモノだろう。

しかし、暮人のみならず、彼の家系は基本的にその手の事には興味が薄い。

彼等にとって信奉すべきは己の肉体、そして修めた技術。

実戦では、どんな手を使うことも認めるが、己は使わない。

「お前は、次期当主、だったな」

「アンタの弟のせいで頓挫してるがな」

毒のある返答。だが、千冬にも分からなくてはならないこと。

自身の親友が噛んでいる可能性も高く。そして、繋がりが無いであ

ろう暮人は完全なトバッチリ。

「……………」

「カツ！そんな顔すんなよ。別にアンタを責めてる訳じゃない。ただ、毒の一つでも吐かなきゃやってられないって話だ」

「……………」だが、授業を受けるつもりはない。違うか？」

「さあ、な」

言葉を濁した暮人は、素振り棒を肩に担ぐと後ろ手に手を振ってその場を離れた。

その鍛え抜かれた背中を見送りながら、千冬はため息をつく。

彼女が思うのは、自身の弟について。

一週間。いや、正確には残り6日だが、自分に頼ってくる素振りもない。

正直な話、認識が甘い。それどころかお粗末と言う他無い。

相手は、高飛車であり傲慢さも見え隠れするが代表候補生なのだ。おこぼれや、賄賂で成れるものではない。

仮に慢心状態で相手をされて、漸く勝ち筋が見えると言うレベル。出来ない事を、出来ないと言うことは恥ずかしいことではない。むしろ、そのまま何もせずに出来ないままの方がよっぽど恥ずかしい。

一夏はそこをはき違えた。

家族を頼ることは間違いいではない。いや、むしろプロフェッショナルが居るのだから頼るべきだろう。

「ままならんな」

彼女の呟きは、校庭に融けて消えていった。

漆

実力差、理解してこそ、一人前。

そんな川柳擬きを頭の中で思い浮かべながら、暮人は目の前に対峙する相手に目を向ける。

(鈍ってるのもあるとは思うけども……………そもそも弱い、か)

「構えないのか？」

「さあ、な」

気の無い返事に、防具を身に付けた一夏は若干の苛立ちを感じていた。

こうなったのは、彼が幼馴染みの箒にISの特訓をお願いしたことに始まる。

／

朝の鍛練を終え、汗を流した暮人は制服に着替えて、食堂へと向かっていた。

夕飯を相当に食べた彼であったが、朝の鍛練で完全にエネルギーを使いきってしまったっており、先程から腹の虫が鳴き止まない。

何を食べようかと思案していると、

「昨日ぶりだな、島津」

と声を掛けられた。

振り向けば、そこに居たのは箒と少し驚いた表情の一夏の二人組。

「よお、おはよー」

暮人は、少し振り向き挨拶をするとそのまま止まることなく進んでいく。

その背を追う箒と、急に動き出した彼女を追うように慌てて動く一夏。

彼からすれば、仏頂面がデフォルトであった幼馴染みが自分から他人との接触をとるといふ行為に驚いていた。

一夏から見ても、島津暮人という少年は不真面目で変な奴という印象

である。

授業はマトモに受けず、自身の姉である千冬に何度か折檻を受けて、その上で無視を決め込んでいたからだ。

その印象が少し変わったのは、セシリアとの一件から。

彼は、ISを宇宙服だと言った。そして、そんな物で戦おうとする者達をおかしいと言った。

一夏は今まで一度もそんなことは考えたことがない。

そもそもISは、幼馴染みの箒の姉が造り上げて、世に出したものだ。そして、女尊男卑という世の中になっても、彼はどちらかということやほやされる側の人間であり、明確な悪意と対峙したことがない。

いや、過去に一度だけあったか。だがそれも、姉の力によって払われた。

悪くいつてしまえば、世間知らずなのだ。そして、自分の意見が薄い。芯が細い。

ともすれば、アツサリと折れてしまいそうな程に、細い。

更に己を正確に測れていない。

例えば、今回の一件。セシリアとの決闘も、普通ならば やらない。何より、ハンデ云々の話は出てこなかったはずだ。

暮人は否定したが、やはりこの世界でISというものは兵器の側面があることは否定できない。

兵器は、道具だ。そして、道具の練度は練習の積み重ねによって成り立つ。

代表候補生ならばその時間は300時間を越えるだろう。そして、その時間もただ遊んでいるわけではない。

そんな相手に、マトモに乗った事が一度しかない彼が敵う見込みは限りなく低いだろう。

もっと言うと、その際のハンデ発言は周りには気付いていなかったが、女尊男卑ならぬ男尊女卑。つまりは、女性が男性よりも力で劣ると言っているようなものだ。

そんなことはない。少なくともこの世界では、そんなことはないの

だ。

ISを持ち出されてしまえば、勝てるのはそれこそほんの一握り。少なくとも正面からでは勝つことは難しいだろう。

世間を知らない、世界を知らない。自分が恵まれた立場であることを理解していない。

「なあ、箒」

「なんだ？」

「俺のISの練習、見てくれないか？」

だからこそ、最初に頼る相手を間違った。

箒の内心には、二つの思いが浮かぶ。

1つは、初恋の想い人に頼られた喜び。もう1つは、何故姉である千冬に頼まないかの疑問。

口を開けば、後者の疑問が表に出た。

「何故、私なのだ？お前には、千冬さんが居るだろう？」

「それは……………何と言うか千冬姉には頼りたくないって言うか……………」

「……………まあ、良いだろう。だが、ISは使えないぞ？」

「何でだ？」

「訓練機の貸し出しは予約制だ。次に貸し出されるのは予約して一ヶ月後だな」

「ま、マジか……………」

「それに私も、まだまだ修行中の身だ。放課後丸々は使えない事を分かってくれ」

「え、でも全国大会で優勝した、んだよね？」

「あんなもの、誇るほどじゃない。私より強い剣士などごまんと居る」
少なくとも一人は、確実にこの場に居る。学園で見れば二人は確実

だ。

「千冬姉、か？」

「いいや、違う」

「じゃあ……………」

「島津だ」

誰だ、と一夏が問う前に箒は答える。

彼女の言葉に大きく目を見開いた彼は、少し離れた席で山盛りの井4種をがつつく暮人へと目を向けた。

「アイツが？」

「ああ」

一夏は信じられない、といった様子だ。

しかし、箒としては同じく剣道部に入部してくれたお陰で目指すべき鍛練相手が出来たといった認識。

「そんなに、か？」

「私は手も足もでなかつたな」

「……………」

箒の言葉に、一夏はジッと暮人を見る。そして、意を決した様に口を開いた。

「なあ、今日行って良いか？」

／

そして、場面は冒頭の向き合う二人へと戻る。

たった二人の男子がぶつかり合う状況に、自然と野次馬が集まっていた。

各々が好き勝手言っているが、基本は一夏を応援する声の方が多いというのが実情だ。

最も、それは暮人の実力を知らない者達なのだが。

昨日のあれこれを知っている剣道部員達は、一様に無言で暮人へと注目しており、一挙一動を見逃さないよう食い入るように見つめていた。

「二人とも準備は良いか？」

この状況で、審判を務める箒は二人に問う。

「おうー」

胴着に防具を姿の一夏は威勢良く返事をし、

「……………」

制服のズボンに、タンクトップ、裸足といった出で立ちの暮人は、竹刀の切っ先を上げようともせず棒立ち、無言であった。

初心者ならば、それは諦めたようにも見える。

だが、それが一定レベルに到達していれば構えと同義だ。

今の暮人は、全身の力を抜きに抜いていた。

立つことに力はいらぬ。竹刀すらも重く感じて持ち上げられないほどに力を抜きに抜く。

「では、始め！」

箒が掲げていた右手を振り下ろす。

「ハアアッ！」

ブランクが有る割には、良いスタートを切った一夏は、竹刀を振り上げ面を狙う。

だが、それは余りにも悠長で緩慢というもの。

「——ゴッ!？」

気づけば、一夏は後ろへとすっ飛ばされていた。

数メートル飛び、尻餅をついた彼は腹部の防具を突き抜けて腹部を襲った鈍痛に思わず腹を抱えてしまう。

(全く、見えなかったな……………)

審判をしていた箒は、何が起きたのかは理解した。理解したが、動きが見えなかったことに内心で冷や汗を掻く。

暮人が行ったのは、突き技だ。右手一本で前へと伸びるような突き。

それが一夏の鳩尾へと突き刺さっていた。

脱力からの硬直。野球のバツティングなどもそうだが、一から十まで力を込め続ける必要など無い。

バツティングならば、バットとボールの当たるインパクトの瞬間。これが格闘技ならば、相手に当たる瞬間だ。

それ以外は、むしろ力を込めることによつて関節の稼働域等を狭めてしまい、パフォーマンスを低下させることにしか繋がらない。

「終わりか？ だったら、篠ノ之に代われ」

踞る一夏に、暮人は淡々とした口調でそう言う。

侮辱の意味などは含んでいない。ただ、立ち上がれない剣士をそのままその場に留まらせておくほど、彼は甘くはなかった。

突きと打撃。その衝撃こそ差異はあれども、加減の度合いは同程度。

それで立ち上がれないならば、その程度だ。

果たして、ふらつきながらも、竹刀を杖に一夏は立った。

「まだ、だー」

「……………言葉では何とでも言えるだろ」

やはり、暮人は構えない。今度は竹刀を肩に担ぎ、空いている左手をポケットに突っ込む有り様だ。

手ぬき、ではない。これは、面の向こうより覗く一夏の目を見た上で、暮人が出した結論の結果だ。

単純な話、一夏は暮人を無意識の内ではいえ下に見ていたのだ。これは、人として誰しもあり得ること。

経験があるだろう。自分よりも出来ない相手を見て、安心したこと。そして、そんな相手に何かを教えて悦に入る、その感覚を。

教室で不真面目な暮人は、明らかに落第生であり落ちこぼれに見える。

そして、一夏から見れば、自分が比べられる相手がここまでやる気がない、ということが何処かスケープゴートのような役割を果たしてくれると無意識に判断していた。

だからこそ、混乱する。今立ち上がったのも、最早惰性だ。

「あああああ!!」

型など無い、雑な突きだ。そして、アツサリと打ち落とされる。

「ガッ!?!」

竹刀が叩き落とされた瞬間に、顔面に衝撃を受けて、一夏は後ろへと思いつきり仰け反って倒れた。

そんな彼を一瞥することもなく、暮人はため息をついた。腹も何も決まっていな相手をするからこそ、時間の無駄というもの。

「マジで、代われ。話にならん」

この一言により、この場は決した。

詰まらない決着がただ着いた、それだけの事である。

捌

一振りの刀が打たれるとき、何十回と何百回と鋼は叩かれ鍛え上げられる。

熱され、冷やされ、叩かれ、研がれ。長い長い時間をかけて、その一振りは完成に至るのだ。

人もそれは同じだ。

その資質が玉鋼か、それとも屑鉄か。それは誰にも分からない。

しかし、鍛えなければ結局ただの鉄の塊でしかない事は確かだ。

まあ、見苦しいといえば断然前者を磨かない事だろうが。所謂、宝の持ち腐れという奴である。

勉強であれ、武術であれ、鍛えなければ結局、屑鉄に成り果てるだろう。

「ふうー……」

暮人は、その手に愛刀を握り、静かに息を整えていた。

ここは、IS学園のアリーナの一つ。時刻は、夜遅い。が、無理を言って開けてもらっている。

彼の前に有るのは、一つの鉄塊だ。縦4メートル、横1.8メートル。

厚みは横幅と同程度だ。

暮人の手に有るのは、三尺刀と呼ばれる物。何の変哲もない普通の刀だ。

対して鉄塊はISの装甲や隔壁などに用いられる合金。

その光景を見守るのは、千冬と真耶の両名だ。

名目は、男性操縦者の実力テスト。だが本題は、暮人がどのレベルなのかを知るための事。

彼にもメリットはある。今の自分の力がどの程度なのか把握する目安になるからだ。

「……………チエストオオオオオオオオオオツツツ!!!」

蜻蛉の構えから放つ、雲耀を屈指した一太刀。

至っているかは、分からない。しかし、その踏み込みと振り下ろし

は並みの人間には見切れない。

それは最早単純な斬撃の領域の話ではない。

断ち切る、ではなく斬り潰す。

金属がひん曲がる音が響き、アリーナの床が粉碎されて大きな粉塵が巻き起こっていた。

「ま、こんなもんか」

肩に刀を担ぎ、暮人は呟く。

粉塵が晴れたそこにあつたのは、天辺が妙に凹み、真つ二つになった鉄塊と数メートル縦に傷が刻まれたアリーナの床であつた。

これを成した暮人本人からすれば、それほど鈍っていなくて何より、といった所だ。

元々彼は、力こそパワーを地で行く脳筋タイプ。真つ直ぐ行つてぶつ飛ばす、ならぬ真つ直ぐ行つてぶつた斬るが信条だ。

何より、彼の実家の人間は鉄斬り程度ならば結構アツサリやつてのける。

それは技であつたり、力であつたり。暮人は後者だ。

「やはり、か……………」

「ど、どうしましょう先輩。島津君が生身でこれなら……………」

「自主的には、乗らないだろうが、ISを纏えば、恐らく絶対防御も抜きかねんな」

その光景を見ていた、千冬と真耶の二人は戦慄を隠せない。

好き好んで、暮人がISに乗らないことは彼女達も分かっている。

だがそれでも、その状況は想定しない訳にはいかなかった。

この学園は、ISを扱うせいか女尊男卑の温床になつている面がある。

顔が良く、更に千冬の弟である一夏には被害は限り無くゼロだ。

だが、暮人は違う。その実力を知るのは精々、剣道部の面々や、一夏との接触を見た野次馬位。

後は、彼の不真面目な態度に女尊男卑特有の無駄なプライドを刺激されている者達が虎視眈々と制裁の時を待っている位だ。

因みに後者が手を出した場合。恐らく悲惨な結果が待っている。

暮人は、自分から仕掛けることは少ないが、仕掛けられれば問答無用で叩き潰すからだ。

「……………ん？」

教師陣の相談を知らない暮人は、不意に気付く。

肩に担いだ刀の刃の一部が若干欠けていた。

愛刀、と呼んだが別段思い入れがあるわけではない。

名のある名刀でもなく、ただ振りやすいというだけ。

そもそも彼の実家では、刀は消耗品だ。手入れはするが、何れ折れるというのが認識として定着している。

武器を壊すのは、二流だと言われるが、暮人達からすれば、武器を思いやって実力のすべてを發揮できない事の方が問題だ。

故に、彼らは名刀も使わないし、武器に愛着も薄い。棒切れ一本でも十分なのだ

それが『島津』だ。剣狂いの家系が表に出てしまった弊害であった。

／

セシリア・オルコットにとって、世の男性というものは、すべてからく見るに耐えないと思っっている。

その根底にあるのは、常に腰の低かった父の姿だ。

彼女は、強い母を尊敬していた。そして、常々、何故この様な男と結婚したのかと不思議に思っていた。

女尊男卑の世界になる前から、常に腰が低く、ペコペコと頭を下げてばかり。そして、世界が変われば、それはより一層強くなっていた。一度、母に訊ねたことがある。何故、父のような男と結婚したのかと。

答えは、返ってこなかった。その代わり、いつものように、カッコいい微笑を浮かべてセシリアの頭を撫でたのだ。

それも数年前に壊れた。

列車事故が発生し、両親はそのままアツサリと帰らぬ人となったのだ。

その跡に待っていたのは、彼女に残された遺産を目当てに近寄ってきた大人達。

辟易とした。

悪意、悪意、悪意、悪意。次から次へと悪意の嵐だ。

そして、そんな最中でIS適性検査によってAランクという高ランクを叩き出し、代表候補生となった。

それからは、ひたすらに我武者羅に突き進んできた。

強く。ただ強く。強ければ、誰にも邪魔されない、と。

そして、母の残したモノを守るのだ、と。

そんな意思を持って、更なる研鑽と国からの命令によってやって来たIS学園。

そこには、二人の男がいた。

一人は、世界最強である織斑千冬の弟、織斑一夏。

もう一人は、何の後ろ楯もない島津暮人。

特に後者は、セシリアにとって看過できなかった。

何故、そうもやる気が無いのか、と。その席にはもつと相応しい者が居ただろう、と。

だが、その認識も少し崩れた。それは、一夏との決闘騒動の際だ。

ISに携わる者達とは、明らかに違う視点。そして、自分を全く見ていなかった。それこそ、羽虫でも飛んでいるかのような、そんな無関心。

不快であった。無気力無関心な男に新たな視点を与えられたことが不快であった。

それは所詮は、男だと侮る気持ちから来ているもの。

その時までには。

決闘を数日後に控えたある日、セシリアは寝付きが浅くかなり早い時間に目を覚ましていた。

眠り直そうにも寝付けず、仕方無く朝の空気でも吸おうと寮を出て少しした時に、それを見つけた。

「彼は……………」

それは、何かと気に入らない暮人の背中。胴着姿であり、その手に

は妙な物体がある。

丸太に鋼の棒を付けた鍛練棒。

少なくとも、セシリアは持ち上げられるとは到底思えない。

彼は、それを苦もなく片手で持ち上げると肩に担いでグラウンドへと向かっていった。

未だに、夜明け前であるため、グラウンドには人の気配処か、鳥などの影も見えない。

その片隅で、彼は素振りを始めた。

踏み込み、振るう。その繰り返した。

セシリアが注目したのは、そのパワー、ではない。

(全く、ブレませんわ……………)

踏み込み、そして振り下ろしは重力も相俟って腕へと掛かる負荷はかなりのものだ。

だが、先程から一振り一振りがピタリ、と止められる。そして、一度たりともふらつかない。

見蕩れた。ただ単純に、その素振りに見蕩れてしまった。

そこには、男だからと侮るような感情はない。

この時間は、グラウンドに二人以外の生徒が来るまで続くのだった。

時は流れて、今日はクラス代表決定戦。アリーナには、クラスメイトのみならず多くの生徒が集まっていた。

「で、やっぱり貴方は行かないのね」

「あ?」

ブン、ブン、と何度も何度も丸太を振るう暮人に、楯無は呆れたような表情だ。

本当ならば、彼もクラス代表の候補に挙がっていた可能性もあった。

しかし、セシリアとの一件で周りが飲まれ、一夏も巻き込む間も無く彼は教室を出た為にこの話は机上の空論を出ない。

(それにしても、スゴい力よねえ)

目の前で百キロは超えているかもしれない丸太が何度も振るわれるのを見るのは、中々の迫力がある。

楯無は、どちらかと言うとスピード寄りのバランス型。合気を基にしている。

対する暮人はパワー型。一撃必殺こそが至上であり、その為にすべてを磨いている。

さて、散々暮人をパワー型パワー型と言ってきたものの、剣術で重要なのは間の取り方だ。

近すぎれば威力が出ず、遠すぎれば当たらない。

更に言えば、刀は単に振り回すだけでは相手を断つことができない代物だ。

刃筋を立て、真っ直ぐな軌道で、踏み込みと振りの動きを一致させる。更にそこから、相手の呼吸を読み、間を測り、外すことが肝要。

「ねえ、島津君」

「なんツ、だツ?」

「貴方ってI Sには、乗らないの?」

「興ツ、味ツ、ないツ、なツ」

「けど、データとりはしなきゃいけないわよ? 織斑君は、専用機を渡さ

れてるし。貴方にも国から打鉄が支給されるしね」

打鉄。第二世代機と呼ばれるモノであり、日本が開発した機体だ。防御寄りのバランス型であり、他の機体に比べて若干小型。装備は、アサルトライフル、近接ブレードが主であり、更に両肩に再生する実体盾が1つずつ装備されている。

ただ、現行の代表候補生や国家代表等は基本的に第三世代機に乗っているためどうしても機体性能差があることは否めない。

勿論、機体性能差だけで全ての勝敗が決する訳ではない。乗り手の実力も反映されて、初めて勝敗は決まるのだから。

というより、初心者に癖の強い第三世代機を充てるのがそもそも間違いだらう。

自転車に乗れない人間に、何の説明も無く曲乗りしろと強要している様なものだ。

間違いなく、失敗する。

閑話休題

「島津君は、国が嫌いなのかしら?」

「おう」

ISの話題には、食いつかないと判断したのか楯無は話題転換も兼ねて、気になることを問うた。ノータイムで返事が返ってくる。

「どうして?」

「どうしてもこうしても……いきなりやって来て、モルモットに成れって言われたんだぞ? 普通、嫌いになるだろ」

元々、暮人には愛国心は無い。基本的に国への感情は、どうでも良い、であった。

つまりは、土0であったのだ。しかしそれも、操縦者の一件で一へと振れた。

更に言うと、今の彼は日本の預かりだが、国籍は剥奪されて無国籍状態でもある。

これは、対外的な措置のためだ。一つの国で縛ってしまえば、それはそのまま各国からの不平不満となつてその国へのし掛かってくる。

上層部にはそれに対応できる度胸も力もなかった。

故に、交渉して己の国に引き込める、というポーズのために国籍を剥奪したのだ。

そこに暮人の感情は一切挟まれていない。国という単位に、個人という重りは何の意味もなさないのだ。

「俺はただ、剣が振ればそれで良い」

暮人は、丸太を担ぐと夕暮れの空を見上げた。

「結果も、意味も、周りも、人も、国も、世界も必要ない。俺は、俺達は、剣が振ればそれで良いんだ」

「……………強いわねえ」

「それは……………どうだろうな」

翌日、クラスで重大発表が行われている頃、暮人の姿は屋上にあつた。

最早教室にも行く気が無いのか、ベンチに横になってぼんやりと空を見上げる。雲がないため、太陽の光が目少し痛い、動く気にはならないようだ。

穏やかな一日。鍛練の時間と実戦の時間が減っていることは不満に思えるが、もとより一人の時間を比較的好む彼にとっては、この穏やかな時間も嫌いではなかった。

「……………くあ……………」

一つ、大きな欠伸をして目を閉じる。瞼の上から光を感じるがそれを見無視して大きく息を吸って、ユックリと吐き出した。

徐々に呼吸を落ち着かせていき、意識も徐々に溶けていくようにイメージする。

だが、不意に嗅覚が甘い匂いを嗅ぎ取り、瞼を差していた光が遮られて影になる。

「うーん……………体はスゴいけど、凡人だよねえ？」

「……………人の面見て凡人か？酷い言い草だこつて」

目を開けると、そこには整った顔立ちだが目の下に隈のある、メカうさみみの女性が居た。

「この束さんに掛かればどんな奴も凡人だからねえ。仕方ないよねえ」

女性は、暮人が起きるとクルリと回りながら距離をとった。

「束……………ああ、篠ノ之束か。ISの生みの親」

「呼び捨てすんなよ、ボンクラ」

「あんた、博士号取ってないだろ」

凄む束だったが、身を起こし立ち上がった暮人は柳に風と受け流している。

その態度が、彼女は気に入らないようだ。

「ちよつと黙ろうか？」

スツと、それこそ大抵の実力者では気づけない踏み込みから、彼女の細指が暮人の首を狙う。

だが、空を切った。狙われた彼が、後退して躲していたからだ。

束の内側で疑問符が上がる。

彼女は自称、細胞レベルでバグっている。その身体能力は千冬と同格か、下手すれば凌駕しているかもしれない。

故に、言っでは何だがかなり強い。

そんな彼女が、ただ避けるだけの暮人を追いきれない。勿論、発明品なども使っていないため全力とは言えないが、彼とて刀どころか反撃もしないため、ドッコイだろう。

それだけではない。追い込むように束は動いているのだが、いつの間にか円を描くようにグルグルと屋上を回ることになっている。この間に、植えられている花壇などに踏み込むなどもない。

「……………チツ」

このままでは罅が開かないと、束は手を止め立ち止まった。

暮人も同じく、一定の距離で立ち止まる。

「アンタ、大分読みやすいな」

「は？何言ってるの」

「頭良いのに、思考がガキだって言ってるのさ」

見下す相手にここまで言われて、東の視界が赤に染まる。そこで暮人は手を前に出した。

「ほら、カッとなった。成長しきれてない子供の癩癩と一緒にやねえか。そんなんだから、宇宙服で戦う変な世界になるんだ」

「……………」

宇宙服で戦う、というところで視界が元に戻る。そして、東の内側に現れるのは何だこいつは、という疑問だ。

完全にペースを握られていることは、この際目を瞑る。

「調べたからな。ISは一回世に出てる。けど、認められなかった。だから、派手なことをしようって事だったんだろ？」

「……………」

「けどさ、だったら何でミサイルなんか使うんだよ。宇宙に行つて、全世界中継でもすれば良かったじゃねえか」

暮人の疑問。というよりも、これは凡人と天才の視点の違いから来ることだ。

一を聞いて、十を知る。という言葉がある。これは天才を指したモノだ。

つまり、天才は一端を知るだけでその全貌を理解できるということ。

対して、凡人は一を聞いて、辛うじて二の触りを知る程度だ。

つまり、凡人は絶えず一を聞いて一を知り、積み重ねていかなばならないということ。

十年前、白騎士事件で世界はISの戦闘能力という一端を知った。しかし、悲しいことに世界は天才の集まりではない。割合的には凡人が多いのだ。

結果として、世界は戦闘能力と女性しか扱えないという面ばかりを見て、他には気付くことはなかった。

更に、発信者である東がそれ以上の一を示さなかった為に、彼らには積み重ねるべき正しい一が見当たらず、ただ知っている一の上には純物という泥を掛けるに留まっていた。

「なあ、篠ノ之東。世界は、存外バカ何だぜ？一から十とは言わないけ

ど、半分は教えてやらねえと真つ直ぐ進めないバカばかりなんだ。基礎も何もない所に、アンタはビルを突き刺した。けどよ、アンタは原始人にビルをやって意味があると思うのか？精々が住み処になるだけで、会社にはならないだろ？ガキみたいに癩癩起こして逃げ回るのも結構だが、もう少し色々教えてやるべきだったんじゃないか？」

一瞬だけ、口を開いた束だったが言葉は出ない。

何故ならそれは、束自身が切り捨ててきたモノだから。

分かっていた筈だ。理解していた筈だ。何せ彼女が常日頃から言ってきた事ではないか。

自分は天才であると。世界は理解できないバカばかりであると。

そんなバカに、天才の考えを理解させ正しく使つてほしかつたならば、一から十まで噛み砕いた説明をし、懇切丁寧に教えるべきではなかつたか。

それでも良い、と。少しでも分かってくれて、嬉しい、と理解を示すべきではなかつたか。

少なくとも、理解されないから派手にやって認知してもらおう、という行いは癩癩を起こした子供と何ら変わり無い。

「なあ、天才。アンタが我を通じたかつたなら、凡人の視点に降りるか。若しくは——世界滅ぼすぐらいしなきゃならなかつたんじゃないか？」

風が大きく吹き抜けた。

これが、剣狂いと天災の初邂逅。

それは決して穏やかなものではなかつた。

拾

「テスト……………」

「ああ、聞いていな……………いな。そういえば教室に居なかったか」
剣道場にて向かい合う暮人と箒。クラス代表戦が終わった今、ここに一夏は来ない。

一応、今日の放課後は一夏のクラス代表就任パーティがあるのだが、一日サボれば取り戻すのに三日掛かるため、勘を忘れない程度の鍛練を行っていた。勿論、箒はこの後パーティの方に顔を出すつもりだ。

「どうするのだ？ 島津。流石に、テストもダメでは、その……………」

「モルモット行きってか？ テストの内容は、ISの基礎部分だろ？」

「そうらしいな。50点満点で、授業を理解していれば解ける、らしい」

「へえー」

喋りながらも、最初とは比べ物にならないほどに鋭く切り込んでくる箒をいなしながら、暮人は気の無い返事。

そんな彼の様子に、箒は気を揉む。

恋愛感情、ではない。彼女の恋心は未だに一夏に向いているのだ。その心配は、言うなれば弟でも見るかのようなそんな感情だ。

なんせ、彼は学園が始まって一週間の内教室に顔を出したのは、最初の一日のみ。後は全てバックレている。

立派な不良だ。そもそも、IS学園は専門学校であるが、高校だ。国数理英社の五教科やその他副教科に関しても行われている。

理解度チェックの小テストこそISの内容に絞ってあるが、期末は当然全教科だ。

更に、赤点は六十点から。エリート校である。

言ってしまうえば、暮人は端から見るとおバカに見えるのである。

剣ばかり振るっており、その他はおざなり。

というか、箒の中では四苦八苦する一夏が焼き付いており、彼のよ

うに世の男はIS知識への不足が見られると思っていた。

まあ、誤りだが。

脳筋の暮人。意外にも自分の扱う道具に関しては余念無く下調べをするタイプであった。

無知というのは、恐ろしい。

知識は力なりと言うように、前提として知っている時と知らない時では対処に大きな差が出来るというものだ。

勿論、全部が全部知っていれば良いなんて事はない。むしろ、知らない方が楽しめることも多いだろう。

しかし、少なくともISは予め知っておかねば色々と困る。

例えば、クラス代表戦にて一夏が自爆した事件。千冬は、武装を知らないからだ、と言うがある意味それは当たり前だ。

彼の機体は、戦闘中に一時移行を終えて、その折に一撃必殺の零落白夜を扱える雪片式型へと近接ブレードはその姿を変えた。

さて、彼はその時戦闘中。更にシスコンであり、尚且つ憧れの姉の装備を真似たモノを渡された形だ。

戦闘の高揚も相俟って注意力は散漫となっており、更に相手を追い詰めたような状況。

初心者が、己の武装にまで気を割ける筈もなかった。

他にも、セシリアの専用機に搭載されたレーザービット等もだろうか。これは、脳波によってマニュアル操作であるため、分割思考が出来ねばその場から動くことも出来ない。

この様に、ISの装備は癖が強い。更に、技能も癖が強い。青黴チーズとタメを張る程に癖が強い。

であれば、前もって知識を頭に詰めておくことは必要不可欠だろう。

「まあ、何とでもなるさ」

「何処から来るんだ、その自信は」

「積み上げたものから、かな」

／

テスト。学生は避けられない、嫌われイベントトップスリーに入るモノではないだろうか。

あとの二つは、マラソン大会と合唱コンクール。異論は、認める。「えっと、終わった人から退出してもらって良いですからね？あ、他のクラスは授業中ですから静かに、お願いします」

テスト用紙を配る前に、真耶がそう言い始まったIS小テスト。成績には直接反映されないものの、理解していなければ後々困る基礎問題ばかりだ。

問題数は、一問二点の25問。記号や選択、記述など、あらゆるテスト形式を混ぜた一般的なテスト問題だ。

因みに今は、四時間目。早くテストが終われば、昼休みも長く過ごせる。

そして、テスト開始から20分と少し、最初の退席者が出た。

「も、もう終わったの？——島津君」

真耶の問いに答えること無く、暮人はテスト用紙を教卓に置くことさっさと教室を出て行ってしまった。

その背を見送り、彼女は赤ペンを手に取った。

点数がとれていなくても気にしない。むしろ、採れていなければそれを理由に授業に来てもらうことも出来るだろう。

そんな思いを胸に、真耶はペンを走らせた。

「……………え……………」

そして、小さく声は漏れる。

答案は、赤マルばかりであった。

論述式の問題など視点が違う解答も見られたのだが、大筋は外されてはいない。

記号や選択にも引っかけ問題があったのだが、そのどれにも掛かってはいなかった。

そして、テストというのは考える時間が無ければ、どれだけ問題が多かろうとも相当早く終わる。

彼の手には、淀みはなかった。つまり、悩まなかった。

結果、最速タイムと赤い答案が完成する。

カンニングの可能性が無いわけではない。だが、最速であるため周りを見た可能性は低い。

となると持ち込みだが、彼が使っていたのは、鉛筆二本と裸の少し小さくなった消ゴム。

上着の袖を手首より下まで捲っており、仕込みは無し。

暮人は、難癖を付けられる可能性を限り無く削っていた。

というか、性格上、カンニングは苦手なのだ。

何より、元々文武両道とまではいかずとも、武の足引つ張らない程度には勉強してきた暮人だ。地頭も悪くなく、確りと自習もする。

まあ、つまり、やることやってその上で彼はやりたいことをやっているのだ。

出席日数こそ危ういが、学力は確りと身に付いている。

答案を提出しながら、箸は一人成る程と頷いていた。

あの自信は、根拠の無いモノではなかった。実際に積み上げたものからの結果をただ言っていたのみ。

「アイツは、出来ないことがあるのだろうか」

それは、自然な疑問。

剣の腕も高く、勉強も可能。授業にこそ出していないが、学生として欠点が見当たらない。

いや、サボり癖は相当な欠点に思えるがその対象は授業だけだ。学習はしている。

因みに、暮人ができないことは結構あるのだが、それはまた別の話。

拾一

テストの翌日、暮人は朝から職員室へと呼び出しを受けていた。

「これが、お前の専用機だ」

「……………要らねえんですけど」

「そう言うな。お前の要望は確りと踏襲しているからな」

「今渡すつてことは、何かやってほしいことでも？」

「察しが良いな。まず、お前には授業の際に手本を見せてもらう」

「……………初心者に言うことじゃねえでしょ」

「いや、手本というのは専用機によるISの動きを間近で見せるのが目的だ」

「気は、乗らないっすねえ」

渡された鈍色の細い鎖を見ながら、暮人は顔をしかめる。

彼の専用機は、第二世代の打鉄だ。

学園には、同じく第二世代のラファール・リヴァイヴが配備されているのだが、こちらはバランス型の銃器を得意とした機体だ。

一応近接武器はあるのだが、それ以上に様々な銃器に目が行く。

「で、もう一つは何すか」

「……………お前に、試合をしてもらいたいんだ」

「お断りします」

千冬の言葉を、正面から切って捨てた暮人はそのまま踵を返して去ろうとする。

そこを彼女は止めた。

「まあ、待て」

「データ取りとか言わんでくださいよ？俺と織斑は似たタイプですし、あっちは第三世代。第二世代の近接攻撃データなんて山ほどあるでしょ」

「男性操縦者の——」

「それこそ織斑で良いじゃないっすか。あっちも刀使うって聞きましたし、ワンオフアビリティーも発現してるなら、それこそ俺要らないっすよ」

ワンオフアビリティというのは、言わばIS特有の必殺技のようなもの。

一夏の零落白夜がその一つに挙げられる。効果は、防御無視の攻撃。代償として自分のシールドエネルギーを食われてしまうため、燃費が恐ろしいほどに悪い。

だが、千冬の関心は暮人の口から出てきたワンオフアビリティという言葉ではなく、何処からその情報を得たのかという点。

そんな彼女の疑問に気付いたのか、暮人はニヤリと頬の端を歪める。

「女子ってのはお喋りが好きなんですよ。視界切って目をつぶってるだけでも色んな事が知れる」

世間一般では、盗み聞きはマナーの悪い行いとされている。そして、悪化すると盗聴などになる。

しかし、教室等でボツチの人間の主な情報源はその盗み聞きであるのだ。

暮人は、正直なところ浮いている。クラスでマトモな交流があるのは、筈ぐらいだ。

一夏は、あの放課後に行った試合が尾を引き、セシリア等も含めた女子は、今一彼の独特な雰囲気踏み込めずにいる。

因みに、この様なときに突っ込んでくるほんわか少女は、姉と上司に止められているため接触できていなかったりする。

「……………はあ……………お前との会話は疲れるな」

「だったら、無視すれば良いじゃねえですか。少なくとも、俺はそつちが気が楽だ」

教師に無視を勧めるのはどうかとも思われるが、精神的安定を求めするために誰かを無視することは、少なくない。

例えば、不良生徒を無視するクラスメイト達。そうせねば、絡まれるからだ。

暮人としても、放置される方が望ましい。

剣士として、そして求道者でもある彼にとって、周囲の干渉ほど煩わしいモノはないからだ。

その筆頭は、教師だろう。彼の実家は、むしろ放任。大きな家であり、家族という括りはあれども全員が基本は個人プレーであった。酷いときには、一ヶ月丸々家族全員が、自分以外の家族と顔を会わせない等もあったほど。

それに慣れているせいかな、暮人は初めて学校に行った時には酷く驚いたものだった。

ここまで、他人というのは自分に干渉してくるものなのか、と。面倒だった。どうしようもないほどに。

その後、試行錯誤の末、彼はある答えを得る。即ち、教師が気にする生徒を知ったのだ。

勉強は平均よりも若干優等生寄り。運動も平均。素行は悪くなく、大人しい。

つまり、必要以上に目立たないというのがベスト。

もつとも、この学園に来た時点でその方法は使えないのだが。

「兎に角、義務だ。お前のデータもとらねばならん」

「……………」

「そう睨むな。銃を使えないことは知っている。格闘戦、いや、剣士としての実力を十全に見せてくれれば良い」

「……………はあ」

ため息は、降参の証。

これ以上、駄々を捏ねても意味がないと判断し片手を振るのだった。

／

放課後、この日のアリーナはいつぞやのように多くの生徒が集まっていた。

「見世物かよ……………ダルい」

請け負った手前、逃げられない暮人はピット内のベンチに腰掛け壁に凭れると大きくため息を吐き出した。

今の彼は、ウエットスーツ型のISスーツを纏っており、その下の

筋肉が荒々しく主張している様な姿だ。

彼の他には、人影はない。反対側のピットには、今日の対戦相手が
“二人”居る。

戦うことは、別に良い。問題は、それにISを使わされるという点。
気が乗らない。

因みに言うと、今回限りという約束だ。この後は相当なことが無ければ、ISを扱うことは無いだろう。

そうこうしている内に、時は来た。

アリーナからは歓声が聞こえ、どうやら先に相手が出てきたらしい。

そのまま管制塔からコールされ、暮人も打鉄を纏った。

「——気が乗らん」

そう呟き彼はアリーナへと飛び立った。

／

アリーナに、その機体が降りてきた際に観客席から出たのは、退屈なため息と小さな敵愾心。

第二世代機打鉄を纏った暮人は、そんな空気をモノともしないのか一瞥することもなく、呑気に欠伸をしていた。

彼の打鉄には改造が一応施されている。

まず、両肩の実体シールドが外され、全体的に装甲がパージしていた。

言っではなんだが、軽装甲。最早、防衛特化の打鉄の面影は無いと言えそうな程にスリムで洗練された見た目だ。

何より、IS独特の手足の延長、というよりも具足や籠手のように鎧のように腕や足そのものに引っ付いているような見た目となっている。

そんな彼の手には、打鉄の近接ブレード莖が一振り握られていた。

今一緊張感の無い暮人の前に相對するのは、純白。

第三世代機、白式を纏った一夏である。

彼の手には、雪片式型が握られその表情はどこか強ばっている様にも見えた。

思い出されるのは、少し前の剣道場での一件。文字通り、完膚無き迄にボコボコにされた際の事だ。

正直、直視したくない過去だが、心の何処かで今回はそうはいかないと言う樂觀も鎌首をもたげていた。

彼も勉強はしている。そこで、第三世代と第二世代の戦力差を知ったのだ。

更に言うと暮人は、試験の際に乗ったキリで今まで来ている。

対して自分は、代表候補生と良い勝負ができる程度には戦えた、という自信が芽生えていた。

『それでは、試合開始ッ！』

「オオオオオッ!!」

合図と同時に飛び出す一夏。白式は、近接しか攻撃手段が無い代わりにその機動力はかなりのもの。格闘戦ならば随一と言って良いほどの機動力を誇っていた。

だが、残念なことに搭乗者が未熟者である。

「————お粗末」

「ガッ!?!」

速いだけの突進など、暮人にとっては自分からの近づいてくることに変わり無い。

さっさと、剣を掲げて振り下ろしていた。

一夏も目は、悪くない。少なくとも迫ってくるレーザー兵器に反応できる程度には優れている。

しかしこの瞬間。斬られるまで、彼は相手の動きを追えてはいなかった。

ここには、暮人のこれまでの集大成、その一端が関係している。

剣を掲げて、振り下ろす。

たったそれだけの事を十年以上やってきたのだ。

最初は百回振ることすら出来なかった。しかし、努力を続けていけば百を超え、千を超え、万に届き、億へと至る。

手の皮は、ずる剥け。足の裏は血豆だらけになり。それでも振るい続けたのだ。

体に染み付く、とはよく言うが。暮人の振りは正にそれ。無駄という無駄の全てが省かれ、最短距離の往復を駆け抜ける。

(き、斬られた………のか?全く見えなかつた………)

大きく切り裂かれた正面の装甲と、削れたシールドエネルギーの数値を見て、一夏は驚愕する。

斬られた事は、理解した。しかし、不可視の速攻は彼の認識速度を越えていた。

いや、正確にはISのハイパーセンサーは捉えていたのだがアラートが鳴る前に斬られたのだ。

立ち上がった一夏だったが、そんな彼に濃密な殺気が襲い掛かる。慌てて顔をあげれば、暮人が蜻蛉をとっていた。

剣は凶器、剣術は殺人術。

有名な漫画の台詞だが、暮人達はその後に込めるは殺気と続く。剣を抜いた、刃を向ける、故に必ず殺す。

「……………チエストオオオオオオオツツツ!!」

一瞬の溜めを作り、叫びながらの前進。その圧力は、一個師団の突撃にも引けをとらない凄みがあった。

その圧力に、一夏は反射的にガードの姿勢をとっていた。

相手の構えは、蜻蛉。この姿勢から放たれる攻撃は振り下ろしが基本だ。

雪片式型を横向きに持ち上げ衝撃に備えるべく足を開く。

もつとも、それは悪手以外の何物でもないのだが。

「オオオオオツ!!」

「っ!」

一瞬の拮抗すらも許さない。接触と同時に、まるで大瀑布の下にでも突っ込んだ衝撃を受けて、一夏はアリーナの床へと叩きつけられていた。

新撰組局長、近藤勇をして初太刀を必ず外せと言わしめた薩摩の太刀。

その破壊力は、防御すると思つた時点で負けている。終わつた。島津の剣は、防御という前提を叩き伏せる。シールドエネルギーも絶対防御も関係無い。地に伏した相手に、最早向ける剣を彼は持ち合わせてはいなかった。ピットへと戻つていく彼に、観客達は化物を見るような目を向けていた。最早そこに侮りの意思はない。少なくとも、虎の尾を踏む度胸のある者は居なかった。

／

暮人の戻つた反対のピットは重苦しい空気が漂っていた。原因は、あの一太刀。見えず、防げず、一撃必殺。

「……………やはり、一年ではアイツが頭一つ、いや、体一つは上か」立ち上がれない弟を見ながら、千冬は呟く。彼女の手元にある資料には、暮人の入試の折りに録られたデータがある。

その一つにIS適性というものがあつた。これは、言うなれば相性の良さと才能を可視化したようなものだ。例えば、一夏はB。千冬はS。セシリアはA。箒はCだ。ランクが高ければ高いほどに、ISを動かす際に生身と変わらずに扱うことが可能となる。

さて、そんな適性だが暮人は、Dだ。起動は可能。しかし、動かし戦闘となると枷と変わらない重さが彼の全身にのし掛かるのだ。

だからこそ、今回の打鉄は大規模な改造が施され、肉体に密着するような構造となつていた。

つまり、手足の動きをダイレクトに反映することで、適性の低さで出てくる反応の鈍さをカバーしていた。

出来ることは、何でもする。人間は何でもせねばならない。

それこそ、それ以外の才能が無い、ならば尚更だ。
「剣狂い、か………狂うべくして狂ったのか。狂わされて、狂ったの
か」

彼女の言葉に答えるモノはない。

拾一

九州のとある山奥に存在する日本家屋。

周囲は、一部が禿げた山々に囲まれた自然一色な場所であり、その全てがこの家の所有物だ。

彼等は、剣狂いと呼ばれる。

来るもの拒まず、去るもの追わず、敵対するもの斬り殺す。がモツトーだ。

とはいっても、今の世の中では最後の一つが果たせる筈もなく、八分殺しに留めていたが。

因みに八分殺しの結果は、呼吸し、心臓が動いている、というもの。その他に関しては、切り取ろうが、抉り取ろうが、穿ち取ろうが、関係無い。

そんな修羅の家。始まりは、数百年以上の歴史があった。

九州で島津と聞けば、薩摩を思い出す者も居ることだろう。

一応、関係はある。だが、そこまで大した理由はない。

彼らの、元となったのはその島津の分家のようなモノだ。表現があらややかなのは、一概に分家のみでの構成ではなく、様々な人々が集められていた為。

彼等は武人。もつとも、ジゲン流に敗れた者達であったが。

一ヶ所に集められたのは、逗留とそして研鑽のためだ。

彼等が行ったのは、試合、ではなく死合。普通は、敗者に待ち受けるのは死である。

だが、彼等は生き残った。

生き恥を晒し、命乞いをしたわけではない。

その武威によって力を示し、敗北したとしても相手に気に入られ生かされた、というものだ。

勿論、それを疎んで自害しようとする者も多かったが、敗者は勝者に逆らえない。

それこそ再戦して、勝つまでこの場所からは出られなかったのだ。しかも、勝てるレベルに至る頃には逆に武人達がこの地を出たから

なくなる。

何故なら、自分以外にも様々な武人がおり全員が一流。更に、常に研鑽に研鑽を重ねる求道者揃いであったのだ。

無論、出ていった者も少なからず居た。だが、半年と持たずにこの地へと戻り、最期の瞬間まで研鑽に明け暮れていた。

この地は閉じており、外部の人間は入ってこない。しかしそれも、新たな時代を迎えるごとによっていった。

己の研鑽のみに費やした武人達は、一人としてマトモに後世へと己の技を残すことをしなかったのだ。

結果、元の本流である剣術が残り末裔である者達は、何かに追い立てられるようにして、己を磨いてきた。

それは、血だ。武人の、そして求道者としての血。或いは魂の形質か。

言うなれば、この島津の末裔達は、求道の血を濃縮された存在と言えよう。

更に面白いのが、彼等はどれかの武術に特化した様に現れる形質があった。

つまり、基礎はジゲン流でありながら、得意な武術は、槍であったり、棍であったり、過去には弓矢であったりもしたのだ。

そして、特化した武術以外には適性が無い。修めようとしても素人に毛が生えたレベルを超えないことが当たり前であった。

因みに補足をする、このレベルはあくまでも彼等から見ての事。世間一般では十分に一流レベルであったりする。

そんな彼等が剣狂いと呼ばれるゆえんは、単純に剣を振るうものが多いからだ。それ以外は、ここ百年生まれていなかった。

彼等は、剣狂い。武を尊び、血に酔って、魂に従い、他を斬り捨ててきた者達。

忘れるなかれ。彼らの前に法はない。

彼らの刃こそが法なのだ。

／

島津暮人のデータ録り、二戦目。相手は、イギリス国家代表候補生セシリア・オルコット。

彼女の機体は、第三世代ブルー・ティアーズ。

白式が近距離格闘特化であるのに対して、この機体は遠中距離に特化した射撃型。四つのレーザービットとレーザーライフルを主武装としており、場合によっては完封することも可能だ。

「漸く、相対することが出来ましたわね」

「……………」

「私としましても、貴方に恨みはありません。けれど、一夏さんの仇は討たせて貰いますわ」

セシリアは、スターライトmk.Ⅲを構えると銃口を暮人へと向けた。

「……………フウ」

対する暮人は、蜻蛉をとる。

一夏相手には、とらなかつた事だがあの時は力の差がハッキリとあることが分かっていた為だ。

彼の武装は、刀一振り。そしてISは言うなればパワードスーツ。服と何ら変わらない。アシスト機能などはあれども、その実力は本人の技量に左右される。

それ故に、前回は数秒で詰められる一夏に対して後出しで掲げて振り下ろす、という動作を以て迎撃した。

この振りは、極限まで絞られており、掲げて振り下ろす迄に一秒も掛からない。それどころか、大抵の相手では、その動作を目で追うことも出来ないだろう。

そして、今回だが暮人の警戒は相手が銃である事に起因している。銃の利点は、その簡易性。引き金を引くだけで命を奪う、若しくは相手へと致命的なダメージを与えることが可能な点か。

更に距離があることによって、相手は精神的に乱れることが少なくなる。一方的な展開ならば尚更だ。

重要なのは、距離の詰め方。ただ、避けるのではなく、相手にプレッ

シヤーを掛けつつ進むことで余裕を奪うことから始める。

『試合開始!』

「狙い撃ちますわ!!」

開始と同時に放たれるレーザー射撃。いや、狙撃か。

だが、今回の場合は狙撃の利点が潰されている。

本来ならば、一方的に見える状況で一射一殺がベスト。

正直な所、セシリアの装備はスナイパーライフルではなくアサルトライフルの方が一対一の場面では脅威足り得るのではないだろうか。

迫り来るレーザーに対して、暮人は前へと一歩踏み出していた。

たったそれだけの動作で、レーザーは彼の真横を突き抜ける。

そう、彼は斜め前へと踏み出していたのだ。これにより体が踏み出した足へと引き寄せられ、レーザーをすり抜けるような形となった。

そのままジリジリと摺り足で、彼は距離を詰めていく。

焦って距離を詰めるなど、愚者のすることだ。

情報は、戦闘時に何にも勝るアドバンテージ。知っている、と知らないではその差を大きい。

情報収集を怠らない暮人は、短い時間であったが、セシリアの情報は集めている。

その上で、脅威足り得ないが、一発逆転の可能性有り、という判断を下していた。

今のところ、想定の域を逸脱していない。

対して、セシリアは焦っていた。先程から狙撃しているのだが、一向に当たる気配が無い。

「ツ・ブルー・ティアーズ!」

そこで彼女は次の手を切った。出現する四つのレーザービット。

それらは、縦横無尽に飛び交いながら、その銃口を暮人へと向けている。

しかし、狙われた本人が注目しているのはビットではない。

(動きは、無し。違和感もないから、誘いも無し)

セシリア本人の動きであった。

彼女の扱うビットは、脳波によって操るマニュアル式。つまり、複

雑な動作をさせるために指令を送らねばならない。

そして、人間の頭は理知的であるほどに固くなり、思考が一極化しやすくなる。

今のセシリアは正にそれ。即ち、ビットに集中すれば動きが鈍り、逆ならばビットの動きが鈍る。

「……………もう、良いか」

「え……………」

全ての射撃を前進しながら透かしていた暮人は、ここに来て構えを変えた。

蜻蛉から、更に攻撃的な刀を担ぎ上げた形になったのだ。

この姿勢から放てるのは、振り下ろしのみ。技巧を凝らさないシンブルな一刀両断を可能としてくれる、そんな構えだ。

更にここで動きが変わる。

先程までは前進のみであったが、今は距離を詰めながら的確に全ての射撃を躲していた。

背後から、死角から、その全てを見ずに躲す。

もつとも、ISにはハイパーセンサーがあるため死角は実質無いようなもののだが、そこは扱う人間の意識の問題。どれだけ便利な目を得ても、長年の習性はそう簡単に拭えるものではない。

暮人が見ているのは、相手の呼吸だ。この場合は、発砲のタイミング。

人間、どれだけランダムにしているつもりでも、何処かで法則性が出来ているものなのだ。

セシリアの場合は、ビットによる発射のタイミング。番号でも振つてあるのか、1、2、3、4、と規則正しく放たれているのだ。

発射の間隔こそバラバラだが、癖なのか必ずその順番通り。

ここまで来ると相手の裏も勘繰りたくなるが、仮に発射順を変えられても暮人ならば躲せるだろう。

レーザーの嵐を抜け、距離はジワジワと詰まっていく。

そして、遂に接敵。

「くっ！ブルー・ティアーズには——」

「ピットは、六基だろ？知ってるさ」

セシリアの言葉を遮り、暮人は掲げた刀を振り下ろす。

ヘッドパーツ、左の鉤爪、ライフル。これらを一太刀で切り捨てられ、刀がアリーナの床に叩き付けられると同時に発生した衝撃によって、彼女の体は吹き飛ばされていた。

摺り足の移動は、思ったよりも速い。それこそ、慣れば体勢をぶらすことなく走り抜ける事も可能となる。

これも距離を詰められた要因の一つだが、一番は殺気だろう。

彼は、セシリアが飛ばうとする度に濃密な殺気を叩きつけていた。飛んだら、何かある。そう思考に染み込ませて動きを封じ、派手だが細かい動きで着実に距離を詰めて斬り伏せる。

IS戦の売りである派手な空中戦こそ無いものの、堅実な立ち回りだ。

そもそも戦いに、派手さなど必要ない。殺し殺されの状況で、魅せるなど余程の馬鹿か或いは頭のネジがおかしい。

先程の斬撃も、本当ならば唐竹割りよろしく、頭の前から股下まで一刀両断となる一撃だ。

殺しはしない。相手は学生で、これは試合で、何より既に決している。

「終わりだ、英人。これ以上は、殺し合いでしか剣は振らん」

「あ、え……………？」

目を白黒とさせるセシリアに背を向けて、暮人はピットへと戻ってしまった。

試合と見れば負けだろう。だが、一人としてその様な感想は持てない。

負けた。それも完膚なきまでに負けた。

たった一太刀で力の差を、根底にまで刻み込まれたようなそんな結果が転がっていた

「満足したか？先生さんよ。だったら返すぜ」

「出来れば持っていて欲しいのだがな」

「生憎様だ。これ以上は乗らないってのを条件に、今回はこっちが折れてやったんだから諦めな」

暗くなつた寮の廊下で、一組の男女が密談を交わす。

二人の間を行き交つたのは、缶コーヒーと鈍色の鎖であった。

「で？何で今回は、あの二人を相手させたんだ？」

「私としては、経験のつもりだ。言つては何だが、認識が甘いからな」

「……………兵器つてか？」

「お前の考えは兎も角、世界の認識の問題だ。ISは兵器、そして扱う者達は——兵士だ」

「国家代表に代表候補生。体よく言つても、最初に最前線に立つのが決まつてるしな」

「それだけではない。適性を鼻に掛ける者も居るが、あれは国が戦力を測るために導入したものだ。高い適性ほど、危険な場所へと送られる事になるだろう」

「なのに世の中、権利団体やら何やらが動いてるんだつたな」

「下らねえ。中身が空になつた缶を握り潰した彼は、そう呟いて壁にもたれ掛かる。」

「戦争、利権、世の中でもそんなもんか」

「人間は、争いによってここまで来たからな」

「ま、だろうね。他人の腹の内側なんて一から百まで知れるはずもない。だったらしんじられねえつすわ」

「……………」

「国の争いは、縄張り争い。猿と何ら変わらん」

近くのゴミ箱に缶が投げ入れられ、軽い音をたてた。

「お前は、随分と過激な思考をするな」

「事実じゃねえか」

この夜の会話は、誰も知らない。

拾三

島津暮人が力を示した暫くした後、1年のフロアには転入生の話題が駆け抜けていた。

だが、騒ぐのはミーハーな者達だけだ。

例えば、前回の一件で手痛い敗北を被った者達、とか。

「……………ッ！」

その一人、織斑一夏は一心不乱に竹刀を振るっていた。

最初は、剣道で負けた。鈍っていた事もあるが、それ以上に力の差があった。

次は、IS戦で負けた。

心の何処かで、セシリアにも善戦できた事から勝てないまでも良い勝負が出来るのでは、と期待していた。

だが、その結果は剣を一合も合わせる事無く、何をされたのか理解する前に叩き潰された。

そして、知る。自分と暮人の明確な力の差を。

これではダメだと剣を振り直していたのだ。しかし、振れば振るほどに現実を彼を蝕んでいく。

遠いどころか、見ることも出来ないほどの背中。

一振り毎に、その差を直視させられる。

何故こんなにも自分の一振りは非力なのか。何故こんなにも自分の一振りは鈍足なのか。何故こんなにも自分の一振りは軽薄なのか。分かっていない。理解している。それはきつと、どれだけ真剣にたった一つの事に打ち込んできたかの証明だからだ。

自分には、それが無い。中学では、家庭を助けるという理由からバイトばかりであった。

その始まりの感情は、姉である千冬の助けに少しでもなりたいたいというものだ。

立派なものだろう。両親がいない二人暮らし故の行動であった。

仮に、だが。仮に一夏が剣道が続けていた場合、この差は埋まっていたか。

A. 埋まらない。如何に彼が天才的な成長速度を誇つていようと、基礎がガタガタなのだから同じ建造物を建てようとすれば綻びが出て、最悪倒れる。

ならば無駄かと言われれば、そうでもない。

確かに追い付けないかもしれないが、努力することによつて自分の力を高めることは出来るのだ。

結果として強くなることには変わり無い。

只し、両刃之剣だ。何故なら実感する前に先駆者を見てしまい、その結果やる気を失うこともある。

壁があるからこそ燃える、と言うものも居るがその壁が絶対に越えられないことを知っていれば、その炎も弱まる、ないしは消えることだろう。

大きすぎる障害は、人のやる気を削ぐだけだ。

さて、そんな彼を心配そうに見つめる二つの影があった。

1つは、箒。もう1つは、最近転校してきた中国の代表候補生、鳳鈴音だ。

この場にセシリアが居ないのは、彼女も思うところがあり、鍛練を続けているため。

彼女の弱点は、その正確無比な狙撃だ。普通ならば欠点にならないのだが、タイマンの場合は話が変わってくる。

正面から潰し合うだけが闘いではない。それこそ、フェイント応酬による騙し合いや、何でも使う無差別戦など手法は様々だ。

そして、正確無比な狙撃というのはそのまま相手の素直さも表している。

どこを狙うのか、どう狙うのか、いつ狙うのか。

一度でも呼吸を取られれば、後は見切られるのみ。

速くしようと遅くしようと、その流れは変わらないからだ。

暮人戦が正にそれ。もつとも、相手の学習能力と戦闘経験の蓄積量が異常であったが故の事態ではあったが。

後は、近距離戦の弱さか。

一夏との戦いでもそうだが、距離を詰められると途端に弱くなる。

一応、シヨートソードとミサイルビット等を装備しているが、前者は呼び出すことすら難しく、後者は二発ポッキリだ。

この場合、採れる選択肢は二つに一つ。長所を伸ばすか、短所を削るか。

勘違いしてはいけないのが、後者だ。あくまでも削るのであって払拭する訳ではない。

例としては、達人じみた剣術の腕ではなく、達人等を相手に十合程打ち合えるようになる、というのが最終目標。

この十合というのは、一種の目安のようなものでそれだけ達人と打ち合えれば隙も作れ、逃げる算段もつくというもの。

そして、長所を伸ばすというのは、ビット兵器による偏向射撃だ。

これは、放ったレーザーを操作して追尾性能を持たせたりすることができる。

縦横無尽に飛び回るビットとそこから放たれる偏向射撃。更に、そこに精密射撃が加われば、相手の動きを操作しながら回避できないタイミングを自ら生み出せるようになるだろう。

少年少女は腐らずに、努力を続ける。

結果はどうあれ、だ。

／

「良い傾向、なのかしらね」

「急にどうした？」

「一夏君達の事よ。貴方とぶつかったお陰か、努力してるみたいよ」

「?当たり前だろ。出来ねえことを、出来るようになるには努力するしかねえじゃねえか」

生徒会室にて、テーブルを挟んでソファに座り向かい合った、暮人と楯無の二人はそんな会話を交わしていた。

「それは、努力することが、かしら?それとも出来るようになるって事が当たり前なの?」

「前者に決まってるだろ。生憎と俺は、努力が必ず実を結ぶなんて

思っていない。むしろ、望んだ結果を得られる方が少ないと思ってるからな」

「どうして?」

「個人差の問題だ。百の努力で、十の結果しか出ないやつと、十の努力で、百の結果を叩き出すやつ。まあ、資質とか才能の話だな。こういうのは、基本的に天性のもんだ。たまに聞く、努力で限界を打ち破るとか言われるけど、あれもある意味、努力して実らせる才能がある、と言えるだろうしな」

「才能、ね……………だったら、努力の必要性ってあるのかしら?」

「そりゃ、あるさ。結果はどうあれ、才能とか資質とかは、原石だ。努力のカットで宝石になるのさ。それが小粒か大粒かの違いだけだな」
下手なことすりゃ割れるけど、と続け暮人は紅茶を啜る。

この場には、虚の姿はない。彼女は、整備科へと呼ばれており席をはずしていた。

「割れる、ね。それって、アプローチとオーバーワークの事かしら?」

「まあ、な。どんなことでもやりすぎは、体を壊す。限界値位は見定めとかねえとな」

「貴方がそれを言うの?」

「いや、俺らは骨が折れればちゃんと休むから」

「普通は折れるほどやらないでしょ」

「無鉄砲にやってる訳じゃないさ。限界値ギリギリでちゃんと止める」

「……………やっぱり貴方達おかしいわ」

楯無は、呆れたと言わんばかりのため息をついて首を振る。

彼女の家も、対暗部用暗部として厳しい訓練は積んでいる。しかしそれは、あくまでも不意打ちや裏家業に特化したもの。

何より、現代には銃火器があるのだから射撃などをメインに据えて、体術はサブの在り方が強い。

体術には銃を、剣には銃を、暗器には銃を、ISにはISを。

距離と防御力というのは大切だ。特に前者は、有るのと無いのとでは精神的な余裕が違う。

肉眼で見る銃口と、モニター越しにみる銃口ばりに違う。

だからこそ人間は距離をとってきた。石器時代から投げ槍などの遠距離手段を採り、弓矢が銃へと変わるのが武器の歴史だ。

最後には、安全なシエルターに籠って、ボタン一つで隣国を滅ぼすほどになる。

そんな世界に逆行する剣術一家。

「貴方の家に生まれなくて良かったわ」

「あん？出来なきや逃げりや良いだろ」

「そうもいかないでしょ。だって貴方、跡継ぎじゃ——」

「いいや。特にそんな決まりはねえよ。強い奴が継ぐだけだ」

強さ至上主義は、跡継ぎ問題にも顔を出す。

暮人が弱ければ、嫡男だろうと関係ない。強い者こそが正義であり、法なのだ。

「ホント、修羅道ねえ」

「生きてりやどこでも修羅道じゃね？」

拾四

クラス対抗戦。年度において最初の大規模なイベント。クラス対抗と書いてあるが、その命運は代表へと預けられるのだ。

優勝者のクラスには、テザートフリーパスが進呈される。

「甘味、ねえ……………」

姿を変える雲を見ながら、暮人は屋上にて、のんびりとした時間を過ごしていた。

もつとも、今は授業中だ。そんな時間をとるのは間違いであるのだが。

だが、今の彼の頭を占拠するのは甘味の大津波であった。

正直なところ、フリーパスは魅力的だ。食事制限など存在しない彼を縛るのは唯一、金銭面のみだからだ。

その金銭にしたって、学生のお小遣いとして見れば、並みの金額ではない。

これは、彼の家に関することだ。裏家業では首になることが多くとも、彼等を用心棒として雇いたがる者達は多かった。

当然、そんな相手に雇われる際の金額はゼロが最低でも6つは付いているというのがデフォルト。

そして、彼らは依頼完遂後の金に殆んど手をつけない。

まず単純に必要な。半年以上山に籠ることなどさらにある彼等は、サバイバルで生き残る術を物心つく頃には十全に叩き込まれるからだ。むしろ、叩き込んでいないと、死ぬ。

その貯まった金がぶっちゃけ百年単位のモノなのだ。更に、家を出た者が稼ぎの一部を送り付けるために、貯まる一方。

因みに後者は、勝手に相手がやってくることであり、本家が強要しているわけではない。むしろ、使い道の無い紙束が無造作に部屋に転がっている程だ。

とまあ、この通り金には困っていない。しかし、タダという言葉には魔力が秘められている。

ぶっちゃけ、暮人が出られればそれが早いかもしれないが、生憎

と既にISは返納しており、尚且つもう乗る気もない。

そうになると、代表である一夏を強化するのが最善策であるかもしれない。

だが、正直なところ暮人は指導に向いていないのだ。

原因は彼の実家の指導方針をそのまま当て嵌めるから。体が出来ていない人間がやると間違いなく再起不能。二度と剣を振れないどころか廃人になる。

小中生活によつて、彼は常識のある狂人となったのだ。そんなことすればどうなるか理解している。

戦闘狂では（一応）ないのだ。

無論、血を見せる必要に駆られれば問答無用で流血沙汰を起こすが、それはそれ、仕方がない。

彼は理性ある狂人。理解した上で、あらゆる常識を投げ捨てて結果を出すのだ。

「とりあえず、イチゴパフェは外せない」

うんうんと何度か頷き、ベリーとマスカルポーネクリームのパフェを思い浮かべてペロリと舌舐めずり。

因みに、ファミレスのパフェ程度ならば、家でも作ることが可能だ。あれはグラスに材料を重ねているだけであるため。小型のディッシュヤーがあると尚良し。

ならば自分で作れば良いとも思えるが、生憎と島津暮人には、それが出来ない。

正確に言うと、彼は家事全般が出来ないのだ。

サバイバル技術も、あくまでも生き残る事が目的であつて、生活を豊かにする為のモノではない。

そして、基本的に家では生野菜嚙っているような連中が彼等なのだ。

最低限肉や卵などは焼けるが、味付けは素材の味、若しくは塩。

小学校に入学するまで、暮人はマトモな料理を食べたことがなかった。

そして、屋敷はゴミ屋敷——ではない。そもそもそこまでの

物が無いのだ。

洗濯に関しては、胴着を川で洗うぐらいか。

現代というより、最早人間社会で生きていくことすら難しい。

だからこそ、彼等は剣の時間を削って小中へと入学させる。

常識と一般教養は必要だからだ。

まあ、今の彼を見ればそんなものが本当に身に付いているのか不思議に思えることだろうが、気にしちやいけない。

／

剣を振るい、甘味を食べて、授業をサボり、剣を振るう。

そんなローテーションが組まれた暮人の日程。

今日も今日とて、彼はサボり続けていた。

だが、どうやら今回は毛色が違うらしい。

「……………んあ？」

惰眠を貪っていると、滅多に鳴る事の無い端末が着信を告げたのだ。これは、入学後に教師陣に持たされたもの。番号は、千冬と真耶、更に楯無とどこぞの天災のみが入っている。因みに最後は、邂逅後にいつの間に入っていた。

「……………誰だ？」

『暮人君、今どこに居るかしら？』

「どこって……………屋上」

『直ぐに、アリーナに来てちょうだい』

「……………何でだ？」

『今日は、クラス対抗戦よ。襲撃が起きて生徒が閉じ込められてるの。このままだと怪我人が出るわ』

「……………つまり、俺は閉じ込めてるシャツターとかを斬れば良いんだな？」

『話が早くて助かるわ。直ぐにお願い』

「へーい」

通信が切れてボケーツと空を見上げていた暮人は身を起こすとア

クビをしながらアリーナのある方向へと足を進める。

そちらは、柵がありその向こう側は、何も無い。

「よつと」

暮人は、割りとアツサリと柵を飛び越えるとそのまま何も無い空間へと飛び出した。

当然ながら、人間の体で飛ぶことは出来ない。空気抵抗等で落下速度は少し落ちるが些事だ。

彼は、その状態から校舎の出っ張りなどに手足を引っ掛けながら速度を落とし、着地した。

校舎の高さは、20メートルと少しといった所だろうか。

ぶつちやけ、千尋の谷擬きのような場所もある為にこの程度は問題ない。

そのままのんびりと、周囲の危機など関係がないかのようなマイペース。

「……………あ、刀ねえじゃん」

アリーナが見えてきた所で、彼はそんな間抜けなことに気付く。

流石に、アサルトライフルの斉射すらも跳ね返すような鉄板を素手でぶち抜ける保証は彼にもない。

あくまでも、暮人は剣士だ。格闘家ではない。タイ捨流等を修めているならば蹴りなども強力なのだが、今は無いものねだりをしても仕方がない。

棒切れでも何でも良いのだ。辺りをキョロキョロと見回す。

「お探しの物は、これですか？」

「なんだ、見てるだけかと思ってたんだが」

「私はこれを君に渡すように言われただけですよ」

現れたのは、壮年の用務員。その手には、似合わない一振りの刀があった。

黒い鞆に収められた三尺刀。

「……………不法侵入？」

「ここは、日本であって日本じゃありませんからねえ」

「……………まあ、いいや」

用務員から刀を受け取った暮人は、一息に抜き放つ。鞘は捨てた。

「扉の向こうに人は？」

「回避するように楯無君へ伝えていきますよ」

「りよーかい」

一つ、息をついて刀を担ぎ上げる。その瞬間に、暮人のスイッチは切り替わった。

膨大な量の殺気が全身から溢れかえり、目の光が消える。

「ふう……………オオオオオオツツツ!!」

気合い、一閃。分厚い金属扉に食い込んだ刃は一瞬も止まることなく斜めに大きく断ち切られていた。

「セアアアアアアアアアアツツツ!!」

更に返す刀で再び掲げると今度は逆袈裟に扉が切り裂かれた。

シエルター並みの扉は、それで終わりだ。ここから更に切り分けられて完全に取り払われる。

「二丁上がりだ。次」

暮人の歩みは、遅かった。アリーナ内部では、悲鳴が響き渡っているというのに、彼は何も感じていないかのようだ。

彼の認識では、ISは宇宙服だ。しかし、装備された兵装の破壊力は理解しているつもり。

車と同じだ。使い方次第で人を簡単に殺すことができる。

騒ぐなどは言わない。だが、泣きわめくのは違うだろう。

高校生であるから、とか。子供である、とか。関係無い。

暮人からすれば、認識が甘いと言いかない。

故に、暮人は急がない。

周囲からの非難も、中傷も意味をなさない。

弱い理由を他人に押し付ける有象無象など羽虫の羽音にすぎないからであった。

拾五

「死者は、ゼロ。負傷者として一夏君や何人かが出ちやったけど、及第点かしらね」

「で？何で俺は呼ばれたんだ？」

「ちよつとした、愚痴を言いたくなつたのよ」

「……………まあ、甘味が食べられるなら良いさ」

クラス対抗戦襲撃事件の翌日。

生徒会室には、暮人と楯無の姿があった。

「もう少し、早く助けられなかったの？」

「あ？何が？」

「アリーナの件よ。貴方ならもつと早く、全ての扉を壊せたでしょ？」

「そら、な」

「だったら、どうして歩いて壊したの？早ければ被害も——」

「？何でそんなことしなきゃならない。俺は、ただ扉を壊してくれとしか言われてねえよ」

ブスリ、とショートケーキにフォークを突き立て切り分けた暮人は、切り取った分を口に運ぶ。

スポンジ生地と生クリームの競演、更にイチゴの酸味と甘味が淡さって、口の中は幸せ一色である。

だが、彼の言葉を聞いた楯無は、眉を潜めざるを得ない。

「……………助けようって精神は無いのかしら？」

「だから、何で助ける必要があるんだ？」

「それは——」

「アンタ等の言ってることで、やってることだろ？ISは兵器で、自分達はその兵器に選ばれた人間だ、てさ」

アンタは違うかもしれねえが、と続けて暮人は紅茶を啜った。

「使い方次第だがよ。あんなことは普通に起こる世界なんだ。シールドを無効化する兵装が開発されても不思議じゃない。確か、織斑の兵装にもそれがあっただろ？」

「それは……………」

「裏の人間なら分かるだろ。この世界に絶対は、無い。どんな物でも事故は起きる。それにアラスカ条約なんぞ在って無いようなもんだろ」

「そんなこと、ないわよ?」

「ダウト。裏側は真っ黒だろ。国の最優先は自国の利益だ。自由の国とか、元鉤十字とかは何かやらかしてるんじゃないか?」

「発言だけ見れば、暮人君ってテロリストみたいよねえ」

「カカツ!逮捕するか?」

「遠慮しておくわよ。貴方が相手じゃ、被害が大きすぎるもの」
「そうか」

その時、小さく暮人の口が『詰まらねえ』と動いたのを、楯無は見逃さなかった。

人間ならば、誰しもストレスが溜まる。

剣の鍛練の時間を削られ、強い相手と死合えない。因みに後者の相手は、基本的に家族だ。

戦闘狂ではない。しかし、いつまでも凧のような時間を過ごすことは、彼にとつては苦痛だった。

いい加減、フラストレーションによって仮面が剥がれその下に覆い隠した狂気が這い出しかねない。

(けど、殺し合いなんて認められるはずないわよねえ。暴走、は無さそうだけどこの学園で暮人君クラスの人を生身で相手できるのなんて織斑先生位だし……………)

IS操縦者は、総じて生身の身体能力も高いものが多い。

その筆頭は、世界最強の肩書きを持つ織斑千冬だろう。

他にも、国家代表は軍属であることも多く、代表候補生も軍に所属し訓練している事が多いため、総じて一定以上の技量は持ち合わせていた。

だが、それは前提としてIS戦闘を置いたもの。生身の白兵戦でも力を発揮できるか、と問われれば、否であった。

むしろ、暮人のように適性が低く、ISが枷となり、生身の方が強いと言う人間の方が珍しい。

「戦いたいの？」

「ん？ああ、まあ、な。久々に、死ぬ目には、合いたいかな」

「死ぬ目？貴方がそんな目に逢うの？」

「親父とお袋、爺いが一斉に掛かってきたら、そりゃあ、な」

「何やってるのよ、貴方達」

「無制限組手さ。何でもあり、何時でもあり、終わりは全員が脱落するまで」

「……………本当に現代日本なの？」

「その筈だが？」

無差別組手は、彼の語った通り、何でもありだ。

それこそ、敷地から出なければ負けを認めるまで負けではない。

更に何でもありというのは、手を組んだり、罠を仕掛けることも是とするということ。

この家が起こった時より続く、ある意味伝統だ。始まりは、この地に集まった武芸者達のいざこざであったと言われている。

その結果は、血塗れ。

普通は、こんな事態が二度と起きないように心掛ける。しかし、このおかしな家はむしろ推奨したのだ。

結果として、現代にまで続く伝統となっている。そして、一人としてその伝統を止めようとはしなかった。

最長で一年続き。一人を残して全員死亡等という時代もあった。

それでも止めない、馬鹿ばかり。修羅道を好き好んで歩むもの達が彼等なのだ。

「修羅ってるわあ……………」

「変な言葉作るなよ」

／
楯無との雑談から数日。未だに彼の中には、塵芥のようにフラストレーションが積み重なり続けていた。

勿論、鍛練を激しくすれば少しは緩和される。しかし、物足りない

のだ。

血沸き、肉踊る命のやり取りが遠すぎる。

「……………うん？」

一頻り、素振りの丸太を振り回して、全身から蒸気を立ち上らせた暮人が自室の近くまで来ると、首をかしげた。

「何してるんすか、山田先生」

「あ、島津君！部屋にいないから、何処に行ったのか心配してましたよ……………？」

「いつも通り、鍛練つすよ。それより、何のようですか」

部屋の前でオロオロしていたのは、真耶であった。

彼女は、暮人が声をかけると最初に顔を輝かせ、次いで少し寂しそうな顔となった。

その表情に気づかない暮人ではないが、無視する。相手に合わせて揺らぐという面は、彼にはない。

「えっと、今度転入生が来るんです。その一人が、島津君のルームメイトになるから、お知らせに」

「ルームメイト、ねえ……………何か訳ありみたいすね」

「え、ええっと……………」

「男と一緒にするんだ。三人目でも見つかりましたかね？」

「……………」

「それで、織斑と同じ部屋にしないってことは、何か訳有りって事でどうでしょう？」

「うう……………島津君ってエスパーですか？」

「知ってることを繋いで、考えれば誰だって分かりますよ」

暮人は、天才ではない。その代わり、一度覚えたことは、比較的忘れない記憶力を持っていた。

更に、情報を繋ぐことにも長けている。まあ、今回に関しては学園の状況などを理解していれば、誰でも行き着ける答えではあったのだが。

「それで？ソイツはもう居るんすか？」

「あ、まだですよ。近日中ですネ」

「んじや、部屋片しときますわ」

殆ど何も弄っていないが、物騒なブツは健在だ。特に刀は、扱いに困る。

幾つか、真耶との打ち合わせを終えた暮人は部屋に入るとため息をこぼす。

「……………お守りは面倒だな」

とりあえず、彼は刀の隠し場所から変えることにした。

拾六

「シャルル・デュノア。宜しくね、島津君」

「……………」

目の前で頬笑む金髪の貴公子に、暮人は眉根を寄せた。

転入生がやって来た今日も、やはりサボった暮人は、自室にて漸く顔合わせと相成ったのだ。

「……………悪いが、俺は宜しくしない」

「え？」

「ベッドはそつちを使ってくれ、窓際は俺が使ってるからな。先にシャワー使うぞ」

にべもない。暮人は、荷物を纏めるとさっさとシャワー室へと向かってしまった。

その背を、シャルルは呆然と見送るしかない。

教室で話したもう一人の男性操縦者である一夏とは随分と違う。

取りつく島もない、と言ったところか。

「……………気付かれた？」

自分で言って、自分で否定する。

あり得ないと思う。しかし、それを完全に否定する材料はない。

実家で得られた情報は、あまりにも少なかったのだ。

デュノア社は、ラファール・リヴァイブの製造元だ。大企業というのは、そのまま情報収集能力などにも長けている面がある。

そして、得られたのは学校の話程度。実家に関することは、殆ど何も得られていなかった。

これは情報部が無能という訳でもなく、暮人の実家が情報統制を敷いている訳でもない。

単に知っている人間が少ない、というだけだ。

そして、知っている人間も裏側ばかり。

更に付け加えるならば、彼等は全員島津の家に恩恵を受けた者達だ。誰が好き好んで、手札を明かすものか。

ならば敵対組織ならばどうかとも思われる、が彼等も口を開かな

い。

九割が殺され、一割は精神的に殺された為にこれも仕方がない。島津に弓引けば、大抵こうなる。

「やっぱ、足を伸ばして湯船に浸かりたいな……………」

「っ、島津君あがったの?」

「頭と体洗うだけだしな」

寝間着である浴衣に身を包んだ暮人は、シャルルを一瞥することもなく背を向けてベッドに寝転がった。

「えっと、島津君?」

「……………あー?」

「僕、何かしたかな?」

「何でだ?」

「その……………」

「思い当たる所があるんだろ」

「……………」

見もしない暮人だ。だが、シャルルは何も言えなかった。

隠していることは事実だ。そして、その全てがバレている様な気がしないでもない。

「当てるやろうか?」

「っ!」

グルグルと回る思考が、いきなりドアップとなった暮人の顔によって引き戻された。

「あ、当てるって何を……………」

「シャルル・デュノア。お前は、女だろ?」

最初から直球ストレート。まさかの遊び球無しである。

「……………な、何を根拠に——」

「一つ、お前の報道が無かった」

顔を真っ赤にして怒るシャルルだったが、暮人は右人指し指を立てると根拠を語り始めた。

「織斑や俺が見付かったとき、世界的に報道があつたんだ。だったら、三番目でも報道があるだろ」

「それは——」

「隠匿は、無駄だろ。むしろ、他国への牽制やらの為に報道して存在を世界に知らしめるはずだ。そうすれば、周りの国に一定の発言権みたいなものもとれるだろ」

「……………」

「二つ、肉体的なもんだ。まず、お前喉仏が殆んど分からんな」

「そ、それは僕のが発達してないだけで……………」

「確かに、年齢差はある。だが、声変わりは大体九歳辺りからだ。高校生にもなれば、ハッキリとしてくるやつも多い。次に手だ。これはホルモンバランスの問題なんだが、女の手は人差し指と薬指が殆んど同じ長さ。対して男の手は、薬指が長いんだ」

お前の手は、どっちも同じだな、と暮人は立てていた指でシャルルの手を示した。

「他にも、重心が前にある、とかな。女性モノの靴はヒールがあるから、踵じゃなくて爪先に重心が集まりやすいんだ。矯正はしてるみたいだが、ぎこちないぞ」

「……………っ、け、けど、僕は入学を——」

「気づいた上で無視されてんだろ。織斑先生とかなら気付いてるんじゃないか？」

そもそも、世界が男性操縦者に対して過敏な状況だ。であるならば、急に現れた男性操縦者に対してここまで大人しい反応は無いだらう。

とすると、考えられるのは、

「大方、国が圧を掛けたんだろ。理由は……………織斑か。一次移行でワンオフが発現してて、第3世代。更に男性操縦者で、後ろ楯もある。ハニトラだけじゃなく、情報を抜き取ることも潜入理由になるか」

「お粗末が過ぎるな。この学園の奴等がミーハーで助かったな？頭使わねえから、この程度の事も分からねえんだ」

アホくさ、と暮人は嘲笑うとジトリとシャルルを見た。

「言っておくが、俺はお前に関わる気はない」

「え？」

「正直面倒だ。どうせ、先生方は俺に監視でもやらせたかつたんだろうが、俺には興味がないんでな。適当に情報抜き取って、本国にでも会社になでも送ればいい」

「……………止めないの？」

「なんで？」

「だ、だって僕は、スパイ……………なんだよ？」

「んなもん、気づかない方が悪いだろ。ここまでヒントが転がっててなんも考えてないほうが頭おかしい」

「で、でも……………！」

「なんだ？俺に良心の呵責でも求めるのか？お生憎様だ。国がどうなるろうと、織斑がどうなるろうと俺には関係無い」

正直なところ、暮人の印象に残っているクラスメイトなど、箒位だ。戦った一夏もセシリアも名前を出されればぼんやりと頭に顔が浮かぶのみ。大して思い入れも無い。

もつと言うと、今の暮人は眠いのだ。時刻は十一時前。いつもならば寝ている時間であった。

所謂、深夜テンション。眠たくなって騒ぐ子供のようなものだ。

「だから、適当にやつとけよ。俺に迷惑かけずにな」

言うだけ言うと、彼の体はフラリとベッドへと倒れていった。直ぐにスヤスヤと寝息が聞こえてくる。

だが、散々に言われたシャルルは堪ったものではない。

頭の中は、ゴチャゴチャだ。既に敵対というワードが十度は出ており、その全てに却下の判子が押される程度には混乱していた。

「……………明日にしよう」

そして、彼女は考えるのを止めた。



「……………んう……………？」

翌日、日も昇らない早朝。寝付きの悪かったシャルルは物音に目を

覚ました。

薄ボンヤリと開かれた視界。そこに映ったのは、一体の鬼であった。

訂正、それは鍛練の為の丸太を肩に担いだ暮人だ。

ノソノソと部屋を出ていった暮人を見送り、シャルルは大きく息を吐いた。

昨晚、敵対を選ばなくて良かった、と安堵していた。

生身で百キロ超えの丸太を軽々担ぐ相手だ。ISを纏っていても誰が戦いたいと思うだろうか。

絶対防御などの弱点とも言えるかもしれないが、衝撃が貫通してくる事がある。つまり、暮人の鍛練丸太をフルスイングで叩き込まれれば小さくないダメージを機体と搭乗者に与える可能性もあるということ。

「……………どうしよう」

彼女の呟きに答えは返ってこない。

拾七

少女、ラウラ・ボーデヴィツヒにとって織斑千冬は、もはや崇拝の対象と言つていいほどの存在であった。

最初は、落第生であつた自分を拾い上げてきてくれた感謝。

感謝はやがて、憧れへと変わり。

憧れは、崇拝へと変わつていった。

故に、彼女は織斑一夏を認めない。自身の崇拝する千冬の栄光に泥を塗つたと思うが故に、許すことができない。

だがしかし、ここ最近彼女の関心は別に移つていた。それは決して良い感情ではない。むしろ、悪いとすら言える。

問題は、ただ一つ。暮人が尽く千冬の授業をサボっている点。この一点に尽きる。

何より、そのサボりを千冬が黙認していることが我慢なら無い。

一度、一夏の件も含めて問い詰めたのだ。

その結果は、暮人には関わるな、という容認しがたいものであつた。

「何処に居る、島津暮人……!」

放課後、ラウラは暮人を探して学園内を歩き回っていた。

その懐には、物騒なモノが吊り下げられ、腰の後ろには一振りの中イフ。

いざとなれば、使うことも辞さない。

「剣道場、ここか……」

目当ての場所にやつて来た、彼女は扉に近寄るとバレないように中を覗き込んだ。

「居ないか」

「あれ?どうかしたの?」

「む。いいや、人を探していたんだ」

扉から離れた直後に、道場から出てきた剣道部員に問われたラウラは、答える。

「あ、人つて島津君?彼なら外だよ。私達じゃ相手にならないからね」
「外、か」

ラウラは一つ礼を言うと、外へと向かう。

グラウンドでは、運動系の部活が練習に打ち込んでいるところであつた。

だが、そこにも探し人の姿はない。

キヨロキヨロと辺りを見渡し、頭を捻る。

アリーナは、あり得ない。グラウンドにも居ない。寮には、帰っていない。

いったい何処に居るのか、検討もつかない。

暮人はルーチンこそ組んでいるが、基本はブラブラと適当に動き回って自堕落極まりない日常を過ごしている。

野良猫だ。それも縄張りを作らない気紛れのクソ猫。

辛うじて居着くのは、寮の自室か、生徒会室、若しくは食堂位か。

「厄介な……………む？」

半分潰れた視界の右端、そこに妙なものが映つた為に、ラウラは顔を上げた。

「あれは、フランスの……………デヌノアか？」

金髪をうなじで纏めた、自分と同じタイミングで転入してきた三人目の男性操縦者。

本国からの指示もなく、ラウラとしても接触のメリットがないため放置していた相手だ。

そんな彼が、木立を覗き込みながら、どこか挙動不審であつた。

それは直感。ラウラは彼の先に、暮人が居ると何となくそう思つた。

「……………ボ、ボーデヴィツヒさん……………」

「島津暮人はこの先か？」

「え？う、うん……………」

近づいてきたラウラに気付いたシャルルだが、二人の間に特別会話はなかった。

元より繋がりもないため、当たり前か。

木立へとズカズカ踏み込むラウラへと、一瞬だけシャルルが手を伸ばしたが、それも届かず、後も追わない。

そんな背後の葛藤に気づくことなく歩を進めていた、ラウラの聴覚が不意に在る音を拾った。

それは何か空を斬る音だ。それも相当な質量を誇る何か。音の方向へと進んでいくと、そこには開けた空間が広がっていた。草地になつており、辺りは木立であるため余計に明るく見える草地の広場。

「4997……………4998……………4999……………」

その中央にて、胴着姿で素振りをする暮人の姿があった。

一振り毎に、全身から蒸気が吹き出すように上り、汗が蒸発していく。

人間の体温は、炎天下の運動時には40度程まで上がるが、今の暮人はそれ以上に高いかもしれない。

「……………」

ラウラは、その光景に声をかけることすら忘れて、見蕩れていた。武骨ながらも、一本の芯がピシリと通ったかのような背筋。一振り毎に躍動する上腕。百キロはくだらない素振り棒を完全に同じ場所で止める筋力、そして体幹。

軍人として、肉体を鍛えるからこそ分かること。

即ち、レベルが違う。

勿論ISを使った戦闘ならば、負ける気はない。だが、生身で殺り合えば、その結果は悲惨なものになるだろう。

「……………何か用事か？」

「……………」

気づけば、暮人は素振りを終えていた。鍛練棒を側に突き立て腕を組んでラウラを見る。

「……………貴様は、ここで何をしている？」

「鍛練」

会話は短く簡潔に。互いに、書類による情報は得ているものの、話題が無いためだ。因みに、暮人の情報源は楯無である。

「でっお前こそ、何のようだ？随分と物騒なものを持つてるみたいだがよ」

鍛練棒を担ぎ直した暮人は、若干腰を落として笑う。

仮に、銃を向けられれば撃たれる前に鍛練棒を叩き付けるつもりだ。

この場合、どちらが早いかは明白。ラウラの拳銃は制服の下に吊られており、抜くまでにラグがあり、尚且つ狙いをつける為に一瞬止まらねばならない。

対して暮人は、腰を落とすことにより、足でバネを作り、鍛練棒を持つ右腕にも少くない力を溜めている。後は放つだけだ。

示現の太刀は、秒より始り、絲、忽、毫、厘、そして雲耀へと至ることを目指して鍛練を積んでいく。

だが、才があり、鍛練を積んで、体を壊しかけて、漸く忽に至れるというのが人間だ。それ以上、況してや雲耀等の領域は、最早怪物に成らねばならない。

そして、暮人は人間ではあるが、狂人であった。

狂った剣士の速度は、厘。あと一步で、雲耀へと届き、あと一步で人間を辞める手前まで来ていた。

「……………」

相對したラウラは、自然と喉がなるのを理解した。

彼女から見て、織斑一夏は腑抜けていた。故に、サボリの常習犯である暮人は、もつと不真面目でふざけた相手だと思っていたのだ。

しかし、実際のところは違った。内側に一本の真っ直ぐな芯があり、その為の努力を惜しまない。

「餓狼の様に強さを求めるその姿。」

それは、見てはならなかった。少なくとも、今のラウラが見るべき者ではなかった。

強くなる理由も、意味も見いだせない者には、劇薬でしかなかったのだ。

拾八

「学年別トーナメント?」

「そ。補足すると、タツグトーナメントよ」

「ほーん」

ペラペラと、紙の揺れる音が室内に木霊する。

「惹かれない?」

「全くもって惹かれないし、そそられない」

プリントを置いた暮人は、ジト目を楯無へと向けた後、ソファに深く腰掛け、天井を見上げた。

今日も今日とて、生徒会室だ。

「それよりも、俺的にはデユノアが入学できてる理由を知りたいんだが?」

「あら、貴方ってそつちの気があったのねお姉さんビックリよ」

「惚けんな。俺や織斑が入学するときにも、散々嗅ぎ回ったんだろ?

まさか、お国が違うからって手を抜いたのか?」

「……………はあ、話したくないのを分かって言ってるでしょ?というか、分かった上で聞いてるわよね?」

「そりゃ、あんたに配慮する必要とか無いだろ?」

「お姉さん、悲しい」

「泣き落としが効くとでも?」

「思っていないわよ」

楯無はクスクスと笑いながら、一括りの書類束を机に置いた。

彼女は、暮人と向かい合う際にいつも持っている扇子を使わない。

あれは、相手を煙に巻いたり、自身と相手の壁を意識させるためのものだからだ。

では、暮人とは壁を作っていないのか、と問われれば、否となる。何故なら彼女は暗部だから。踏み込んだようで、踏み込ませず、引いたようで、逃がさない。彼女の底など知ろうとするだけ無駄だ。

扇子を用いないのは、単純に意味がないからだ。

誘導もすり替えも、真っ直ぐに聞きたい事へと向かっていく暮人に

は効果がない。

というわけで、二回目以降口許を隠すことはなくなっていた。

「どうも裏で取引があったみたいよ。デュノアちゃんには、二人の情報を抜き取るためのスパイを強要されたみたい」

「二人？俺のデータもか？」

「織斑君と、セシリアちゃんと戦ったとき以来何のデータも送られてこないからでしょ。学園の内情なんて、お上には関係無いもの」

政府の高官は、いくら女尊男卑の世の中でも男の方が多かった。

理由は、ハッキリとしない。しかし、どれだけ女性権利団体が声高に叫ぼうとも、選挙の結果は男が多い。これは、政治だけでなく、軍部の上官などにも言えることだ。

ついでに言うと、主要部分には男が多いため、男女が争えば如何にISがあろうともその勝敗は分からないと言える。

何故なら、兵器として並々ならぬ破壊力を秘めたISも扱うのは、人間であり、人間には総じて弱点があるからだ。

例として、人質や補給線の破壊など。

ISの弱点は、その燃費の悪さ。起動にエネルギーを食い、防御にも食い、その容量は決して多くない。

本来ならば、無限機構を搭載している筈なのだが、そこは束がロツクを掛けており誰にも解除できていなかった。

戦争は、力だけではどうにもならない。その点を世の女性陣は勘違いしている。

第二回モンド・グロツソが良い例だ。

優勝は確実と言われていた織斑千冬は、しかし拐われた弟のために棄権し、結果として決勝戦は不戦敗。

どれだけ強くとも、謀略という名の網に掛ければ万夫不当の英雄すらも潰り潰されるのが落ちなのだ。

「……………阿呆だな」

資料に目を通した暮人は、ため息をついてそれを机へと戻した。

「気に入らない？」

「気に入る方が、おかしいだろ。頭おかしいんじゃないか？」

「まあ、確かに稚拙よねえ」

「そもそもやり方が雑すぎるだろ。捨て駒だって大声で言ってるようなもんだぞ」

「けど、まだバレてないのよね？」

「時間の問題だろ。だって、下手くそだ」

彼から見て、シャルルの男装はお粗末だ。所作の類いも、チグハグで何故周りが気付いていないのか理解できない。

「まあ、確かにねえ。けど、一般的な家庭の子なら気付かないんじゃない？それに、学園に入学する子は、男子との関わりが殆んど無いわ」「つまり、親以外の男と会うことが殆んど無かったってことか？」

「ええ。ついでに、織斑君が気付かないのは彼が鈍いからじゃないかしら？」

「鈍い、ねえ……………」

「彼って、結構ストレートに好意を向けられてるのに気づかないじゃない」

「あれって態と…………じゃないのか」

「……………いつか刺されそうよね」

色恋沙汰に欠片も興味がない暮人でも、周囲が一夏に向ける感情は分かるのだ。

それに気付かない彼は、朴念仁とか以前の問題では無かろうか。

「まあ、彼が刺されるかは時間の問題として。暮人君、トーナメントに出てくれないかしら？」

「お断りだ」

「どうしても？」

「どうしても」

どれだけ交流を結ぼうとも、暮人の意思を動かすことはできない。

「じゃあ、出てくれるならお姉さんを好きにしても良いわよ？」

楯無は、妖艶に微笑むと座ったままチラリとスカートの端を捲って見せる。

「……………」

だが、暮人は一瞥もせずにお茶請けに出されていた、ベリーのタル

トに舌鼓を打っていた。

さすがに、色仕掛けをここまで無為にされると楯無の嶮谷もひきつるというもの。

彼女は、美人だ。それこそ、道行く人が老若男女問わずに振り返る程度には顔立ちが整っており、抜群のプロポーションを誇っている。そんな彼女を袖にする暮人。彼の中では、甘味〓〓〓〓〓〓越えられない壁〓〓〓〓〓〓色慾であった。

ここで少し下世話な話になるが、この色欲の薄さは、家系であったりする。

彼等の子孫が生まれるときは、基本的に戦った後の高揚からの流れに至る事が多いのだ。

切った張ったで、ハイになっってしまうからだ。

それがないと、彼等の色欲は欠片もない枯れた存在となる。

「ちえー……つまんないのお」

「そういうのは、織斑にやるんだな。布切れなんぞ見たところで何とも思わん」

「どうして？経験あるのかしら？」

「いや。けど、家の人間男ばかりじゃないし」

「……………見たことあるの？」

「見せられた。ついでに、見られた」

因みにその時は、鍛練後に川で水浴びしていると同じタイミングでやって来た、修練者の一人が痴女ってきたのだ。

その際には、グープンで撃退した。

「本当に、法律が仕事しないわね。貴方の家って」

「法律無くても苦労したことねえし」

「思ってもそういうことは、言わない方が良いわよ？」

「今は、無国籍だから関係無いだろ」

「……………それもそうね」

拾九

強さとは、いったい何なのか。自身の無力さを一度でも体感した者ならば堂々回りのように何度も考える問いだろう。

「……………」

「……………」

ここ数日、学園でも名物のようになったその光景。

「……………はあ……………いつまで着いてくるんだよ」

「私もこちらに用があるんだ。気にするな」

「便所にまで着いてきてるだろうが……………!」

暮人が何を言おうとも、後を着いてくるラウラには焼け石に水だ。

素振りを見られて数日、彼の後ろをカルガモの子供のように着いてくるラウラが学園中で見られていた。

特に、いつもは傲岸不遜な彼女が、暮人を真似ながら甘味を食べる姿など周囲の癒しとなっている。

「……………はあ」

ここ数日、既に二桁も後半に差し掛かってきたため息。

そこまで嫌ならば振り切れば良いとも思われるが、巨大とはいえIS学園は限りある範囲だ。逃げ回っても何れ捕まり、付いて回られるだけだ。

ならば学園の外に逃げれば良いのかもしれない。しかし、それはそれでメリットとデメリットがある。

メリットは、搜索網が敷かれて強い相手と戦える可能性が出る点。デメリットは、旨いものが食べられなくなる点。

今のところ、彼の内心はどっち付かずだ。いや、遠からず前者に傾きかねない状態ではあるが、今のところはどっち付かず。

「島津暮人」

「……………あ?」

「貴様は、ISには乗らないのか?」

「何で乗らなきゃならないんだよ」

「二人目とはいえ、男性操縦者だろう。義務は果たすべきだ」

「義務、ねえ……………」

これは、相手は違えども暮人が何度も答えてきたやり取りであった。

「押し付けられたものにまで、義務があるとかおかしいと思うがな」

「だが、貴様は動かした。ならば——」

「好きで動かしてねえよ。むしろ、こっちは迷惑してるんだ」

「迷惑だと?」

「そうさ。IS動かしたせいで、俺の将来はおじやんだ。そこで義務やら何やら言われても、な?」

どれだけ必要だ、大切だ、と周りから解かれようともそれ事態に本人が納得していなければ馬の耳に念仏というもの。

「しかし、島津暮人。お前は、合格者の一部を削ったのだろうか?」

「ボーデヴィツヒが、それ言うか?この学園の生徒は緊張感に欠けて、ISをアクセサリーとかと勘違いしてるんだろ?」

「……………何故、知っている?」

「壁に耳あり、障子に目ありだ。敵作る発言も程ほどにしておけよ」

お前が言うな、と言われそうだが、暮人も暮人で裏ではやつかみを受けていた。

同級生、先輩。女尊男卑の思想に染まった者が少なからず手を出してきたのだ。

もっとも、千冬すらも無視するこの男。そこらの小娘など歯牙にも掛けない。

「全部振り払えるなら、問題ないだろうさ。けどな、不相応のビッグマウスは自分の首を絞めるだけだぞ」

／

可愛らしいストーカーが、暮人の後ろを付いて回る事になって、更に数日。

今回は、別件だが暮人はまたしてもため息をつかねばならない事態となっていた。

その日は、新しく手に入れた知識を活用しようと早めに鍛練を終えて部屋へと戻ってきたのだ。

同室のシャルルとは、部屋を共有する以外の関わりはない。そして、この部屋を訪ねるものなど教師陣以外には皆無であり、招くこともなかった。

だが、今日は違う。部屋には深刻な雰囲気漂っており、本来ならば居ない筈の一夏の姿もあったのだ。

一瞬だけ、暮人も眉を潜めたが直ぐにそういえばスパイであったと思出し、触れることはしない。

元より関わる気の無い一件だ。手早く荷物をまとめてシャワーを浴びると、一瞥することもなく自分のスペースへと向かい、時間の空白を利用して刀の手入れを始めた。

「——なあ、島津」

だが、その手が刀を抜く前に一夏より声をかけられる。基本的に相手を名前呼びな彼が、暮人を名字で呼ぶのはその蟠り故だろう。

「お前、シャルルのこと知ってたのか？」

「スパイって事か？それとも、本当は女で男装して潜入してるって事か？」

「ッ！知ってたなら………！」

「どうする？突きだすか？」

荒れる一夏だが、暮人は自然体を崩さない。それどころか、顔を二人へと向ける事もない。

「お前！シャルルの境遇を分かって言ってるのかよ!!」

「だから、スパイだろ」

「それは家の命令で無理矢理——」

「あのなあ、織斑」

熱く語る一夏。しかし、目の前の背中にその言葉は響かない。

むしろ、めんどくさそうに冷や水をぶっかけてくる。

「その程度の話。世の中には腐るほど転がってんだよ」

ガリガリと彼は頭を掻いた。

「世間知らずのお前は知らないのかもしれないかもしれねえがな。この世の中、子

を殺す親も居れば、親を殺す子も居る。金稼ぐために子供に体売らせて、自分は酒飲んでるような親とかも、ザラだ。ニユースでも報道されるだろ？捨て子の報道とかな。あんなの極一部だ。望まない子だからって、ロツカーに捨てたり中絶したり、そんなこともある。お前は、ニユースを、見るたびに熱くなるのか？違うだろ。単にお前は、目の前で不幸話を聞いたから熱くなってるだけだ。喚くしか能がねえなら、部屋に帰って大人しく、クソして寝てろよ」

長く語った彼は、話は終わつたと言わんばかりにベッドから床に降りると刀を包んでいた風呂敷を広げその上で手入れを始める。

本当ならば、研ぎ直したりしたいところではあるのだが、今はモノが無い。

鞘より刀を静かに抜き峰側から、懐紙で表面の油を拭い、打ち粉を行って、布を変えて何度か拭う。

結構手抜きをしてしまったが、慣れていない者が柄より刀身を抜いてしまうと、嵌め直した際に緩んでしまう可能性があるのだ。

「——島津!!」

三度目の打ち粉拭いが終わったところで、漸く頭が追い付いた一夏が食って掛かってきた。

「だったらお前は、シャルルを見捨てろって言うのか!?!」

「……………騒ぐなよ、鬱陶しい。大体、見捨てるも何も何でそんなことしなきゃならないんだよ。何か？お前、スパイの手伝いでもしろって言うのか？」

「そんなこと言ってねえだろ!」

「いいや、言ってる。お前はデュノアを助けたいみたいだがな、何の案も無いなら野良犬の遠吠えと変わらねえんだよ」

「……………案なら、ある」

淡々と返してくる暮人に対して、一夏は生徒手帳に書かれた校則を持ち出してきた。

だが、見せられた側は失笑を溢す。

「やっぱり、世間知らずだな、お前」

「んだと…………!」

「着眼点が間違ってるだろ。フランスがデュノアを調べなかつたはずがない、つてことは国が黙認したつてことだ。当然、デュノア本社もそれは分かつた上で、デュノアを学園に送り込んだ筈だ。バレれば国から切られる事もわかつてる筈なのに、だ」

「……………」

「二方向から見すぎだ。そもそも、何でスパイすることになった？デュノア社の第三世代開発が遅れてるからだ。そこでとつた手段が娘の男装。バカじゃないのか？世界が躍起になつてる男性操縦者だぞ？遅かれ早かれ、周りにバレて嗅ぎ回られれば一発だ。それでも送り出した。そこまで切羽詰まつたのか、若しくは———そこまですべてでも、デュノアをフランスから遠ざけたかつたかのどつちかだろ」

頭使え、と暮人は指摘する。

彼の論は、想像によるもの、と指摘することも可能だ。しかし、絶対により得ないと断言も出来ない事だ。

といつても、この推論は彼がはじめから持っていたモノではない。時間の有り余つていた際に、楯無と共に煮詰めたモノであつた。

無論、単にシャルルを切り捨てるためのもも考えられなくもないが、その場合に被るデュノア社の不利益が多すぎるために至つた論。裏はとつていないが、悪くない、というのが二人の結論だつた。

まあ、だからといつて何かをするわけでもないのだが。

生徒会長であると同時に、暗部に身を置く楯無とは違い、暮人にとっては相手の事情、その他諸々、興味も関係も無い。

「———と、まあ、この程度すら思い付かないつてんなら、手を引け。そもそも、ここら辺は政治家の領分だ。権謀術数の塊みたいな奴等相手に、精神論で吠えたところで無駄だからな」

言いたいことだけ言つてしまい、暮人は欠伸をして、未だに出つばなしの刀を鞘へと収め、ベッドの下へと転がすと、本人はベッドに上がつて布団を被つてしまう。

一夏も、そしてシャルルも。そんな彼を止める言葉はない。

頭の中がグチャグチャになっており、整理がついていないのだ。

結局、今回は一夏の火が消され、シャルルのシンデレラ症候群を一瞬満たすのみで収まることとなり、何一つ解決していない事には、引つ掻き回した当人以外気付くことはなかった。

二拾

デュノア性別判明事件（笑）が起きた翌日、いつもの通り暮人は朝早くから素振りを行っていた。

そんな彼から少し離れた木陰からは二つの影が覗いている。

「……………」

金糸と銀糸。大小の差と隠れる位置に違いこそあれども、その目は真つ直ぐに彼の背中へと向けられていた。

つまり、ストーカーが二人に増えたということ。

実害は、無い。というより、二人の目的が違うのだ。

前者は、話を。後者は、その力を。

それぞれが、全く違う理由を彼へと求めていた。

だが、求められた当人は応えない。既に片足は面倒事へと突っ込んでいるというのに、嫌々と抵抗しているためだ。

そもそも、彼には二人に何かを施せる物はないと思っている。

シャルルに対しては、あくまでも推察の域を出ない、言ってしまうば妄言しか吐けず。ラウラに対しても、剣振り回せ位しか言うことがない。

無責任だろう。元々救う気もなく、基礎の無い人間に自身の鍛練を課す、など。

少なくとも、暮人はしない。ヒーロー願望も、師匠願望も彼にはないからだ。

だからこそ、無視する。それ以外ならば反応するが、上記二つに抵触することは徹底的に無視だ。

それで済む、その筈であった。

／

「ちよーつと不味いことが分かったわよ、暮人くん」

「不味いこと？」

最早恒例となりつつある、生徒会室でのお茶会。楯無が真面目な口

調でそう切り出した。

「これ、見てちょうだい」

テーブルに置かれるのは、数枚のA4プリントをクリップで纏めたものだ。

嫌な予感のした暮人は眉を潜め、しかしながら受け取った。

そのまま中身に目を通した彼は、眉間に寄せたシワを更に深くする。

「……………これ、マジか？」

「私達の想像が、現実になっちゃったわねえ」

「メンドクサ……………」

資料をテーブルへと投げ出した暮人は、ソファに深々と腰掛けて天井を見上げ、大きく息を吐き出した。

「だからって、手を出すのか？」

「表の国際問題なら、無理よ。けど、今回に関しては別ね」

「亡国機業、ね……………裏組織が、何でまた表の会社なんぞを狙うのか」

「正確には、亡国機業の下部組織ね。女性権利団体を後ろ楯にした組織よ」

「それって一部過激派の事だろ？人数はどうあれ、マスコミにも流れてないこの状況で落ち目とはいえ大企業を落とせるもんかね」

「だからこそその、シャルロットちゃんでしょ。男親だし、再婚相手も仲は悪くなかったみたいよ」

「手の届かない、IS学園か。切羽詰まりすぎやしないか？」

「それだけ首が絞まったのよ。多分、これ以上の時間をかければ彼女に実害が出てたわね」

楯無はアツサリと言ったのけるが、お家騒動などには、暮人よりも精通している面がある。

いや、そもその前提として暮人の実家はお家騒動に無縁なのだ。

まず、遺産が無い。正も負関係無く、ほぼ零だ。預金通帳等もなく、借金などもしない。土地に関しては、実質管理は彼らを雇う上役が押さえている。

何より、彼等の家族の情というものは限り無く薄かった。

自分の身は、自分で守る。親が守るのは、子が剣を振るえるようになるまでだ。

「家つてのは面倒だな」

「むしろ、貴方の家が育児放棄って言われるのよ。それより、貴方はどうするのかしら？」

「知らぬ存ぜぬ、で良いだろ」

「言うと思ったわ。だから、これを貴方に」

「あん？」

暮人の反応を見越していた楯無。彼女は、一枚の紙をテーブルへと新たに置いた。

受け取った彼は、内容を確認し、首をかしげる。

「正気か？」

「国公認よ」

「馬鹿じゃないのか？得なんて一つも無いだろ」

「あ、国は国でもこつちじゃなくて、あつちからよ」

「何であつちが、ここにコレ持つてくるんだよ」

「いい加減鬱陶しかったんじゃない？ほら、上の方は男女比率でいくと男の方が多いもの」

「……………で、悪どいこともやってるから証拠ついでに潰せ、てことか」

「逆よ。潰すついでに、証拠を集めるの」

「殺つて良いのか？」

「そろそろフラストレーションも溜まってるでしょ？」

「……………まあ、いい加減実戦に出たくはある」

ギシリ、と彼の腰かけるソファが軋む。

「それにしても、家の名は広がってるんだな」

「当然よ。言ったでしょ？裏じゃ有名なのよ」

「だからって、なあ？」

呆れたような口調だが、暮人の目には爛々と光が灯り始めていた。

どれだけ上品な皮を被ろうとも、彼等の本質は人斬りだ。暴力を信

奉し、その手に肉を断つ感触を味わいたくてうずうずしているのだ。

「まあ、お上の御墨付きだしな。『パスポート』は出るのか？」

「ええ、勿論よ」

「そいつは、良いや」

軽快に会話する二人。しかし、両者の瞳に光は無い。

只々、ドロドロとした汚泥を煮詰めたかのような暗い暗い瞳がそこにあるのみ。

対暗部用暗部然り、人斬り一族然り。

その背に背負う業の深さだけを見るならば、恐らく学園内でも屈指だ。

その事を知るものは、教師の中でもほんの一握り。無論、生徒は知るはずもない。

知らなくていいことだ。

彼女等が後ろ暗く、それこそ二の足を踏むような闇の世界を知ることなど必要ない。

少なくとも、楯無は妹を案じて遠ざけた。暮人は、常人という皮を被った。

そんなものは、本来ならば一高校生が身に付けるようなモノではない。持つような覚悟ではない。

だが、それが今の世の中だ。きらびやかな表とは、違い常に裏はドロドロとしている。

コインの表と裏は交わることは無いのだ。

二拾一

昨今の犯罪事情というのは、中々に綺麗なモノとなっている。

例えば、泥棒。空き巣。彼等は、雑多な格好として普通の服ではなく、スーツ等を下見や実行の際の格好として採用している場合があるのだ。

理由の一つとして、スーツならば昼間から街中を歩き回っても不自然さは然程無く、鞆と人当たりのいい笑みさえ浮かべていれば、営業の人間とでも見られるためだ。

更に、下見と実行を同時に行うこともできる。今の世の中、夜よりも昼間の方が人は油断しており、楽に侵入できる。

場合によっては、玄関からの出入りすらも可能。そして狙われるのは、へそくりの類いだ。

狙われる理由は、偏にそれが家族にも隠している金であるため。

その手の金は、犯人が捕まるまで行方が分からないので諦めよう。

閑話休題

兎に角、スーツというのは正装であると同時にカモフラージュ効果もあるということだ。

そして、それは万国共通である。

「……………」

フランス某都市。ビル街に埋もれるように建つ横にも縦にも大きな建物があった。

ここは、基本的にビル街の住人も近寄らない不可侵領域のようになっている。

理由は単純で、ここが女性権利団体のアジトだからだ。

彼女等の質が悪い所は、その数と話の聞かなさだ。

モンペ等と同じように、ヒステリーを発症しており、兎に角話を聞かない。

そのような相手には、理詰めという言葉がいとよく言われるが、彼女等の場合は形勢が悪くなると、ISという名の暴力で訴えかけてくるのだ。

何より、政治関連にもなまじつか手が届くせいで警察に届け出ても揉み消されることが多い。

その結果泣寝入りどころではなく、国から追い出されたものも少なからず居た。

だが、彼女達には何の感慨もない。むしろ、自分達に歯向かうのだから当然だ、と考えている節さえあるほどだ。

そんなもの、砂上の楼閣でしかないというのに。

建物の前には、一人分の人影があった。

ダークスーツに、黒いネクタイを締めており、更に黒革手袋に包まれた左手には、黒い鍔と柄を持つ機械的な剣の柄を持っていた。

「……………よし、行こうか」

目を引くのは、男の顔。そこには、真つ白で目の部分のみ空間の空いた仮面が着いているではないか。

彼は、真つ直ぐに女権団の本部へと足を進める。

自動扉を潜り、中へ。

本部内は、広々としており高級なホテルのロビーを思わせる豪華な作りであった。

だが、それを全て台無しにするような香水と化粧水の強烈な臭いが漂っており、彼は自身の内側から競り上がってきた吐き気を飲み下すことに苦心していた。

幸いと言って良いのか、ここには受付嬢すら居ない。

だが、入り口正面には受付のようなものがあった。

彼はそこへと足を運び、中を覗き込む。

どうやら、余り使われていないらしく、小綺麗ではあったが、隅の方には埃が目立つ。

そんな状態で、彼は目当てのモノを見付け、手を伸ばす。

「内線の……………一番、で良いのか？」

据え付けの白い電話の受話器を取って、そのまま内線一番のボタンを押す。

『なに？』

耳に押し付けずに、微妙に距離を開けた受話器から女の声が聞こえ

た。

因みに、耳に押し付けられないのは人間には耳紋と呼ばれる指紋に似たモノがあり、身元特定に繋がる為である。

「イマカラ キサマ ヲ コロシ ニ ユク」

片言とボイスチェンジャーの合わせ技で受話器に喋りかけ、相手の返答を聞く間もなく、受話器を切った。

当然、折り返しが掛かってくるが無視だ。

何故暗殺ではなく、こんな敵を増やすような事をやったのか。

答えは単純、詰まらないから。

仮に仮面を着けていなければ、彼の悪鬼のような狂笑を見ることができたことだろう。

悪夢の始まりだった。

／

女性権利団体フランス本部。そのトップ、ルミューズ・マフタン。彼女は、苛立っていた。

あと少し、あと少しでデュノア社を手中に収めることが出来た筈だった。

だが、落ち目の企業であるくせに、相手は愚かにも抵抗し、あまつさえ娘を国外、それも手を出しにくいIS学園へと高跳びさせてしまったのだ。

これにより、計画は練り直し、現社長を引きずり落として、傀儡を据えるという手段はとれなくなった。

何故、ここまで落ち目の会社を狙うのかと言えば、周りが気づきにくいからだ。

波に乗っている会社は、当然世間の目も集まっている。そんな場所で事を起こせば、マスコミなどにも圧力をかける前にスッパ抜かれかねない。

それに比べて、大企業とはいえ国からも見放されかねない今のデュノア社は社長が変わったとしても、新聞の端に小さく乗る程度だろ

う。

ついでに、この乗っ取りは政府の一部高官も絡んでいる。

ISを開発する企業は、ぶっちゃけ軍需工場のようなものだ。作り出す兵装の数々は、その質も相俟って国の軍事力増強へと繋がる。

これは足掛かりだ。水がジワジワと土壌を浸食するように影響力を広げていき、最後に刈り取る。

どちらも思惑があるが、その目的は甘い汁を啜る事にある。

そんな日に、内線が鳴り響く。

『イマカラ キサマ ヲ コロシ ニ ユク』

受話器の向こうより聞こえたのは、片言の機械音声。

誰かを問う前に通話は切られ、かけ直しても相手は出ない。

普通ならば、悪戯電話とでも思うだろう。しかし、今回の着信は“内線”だ。

ゾワリ、とルミューズはうなじの産毛が逆立つような寒気を覚えた。

電話は何と言った？日本語だが、お前を殺す、と確かに言っていた。それが内線で掛かってくる。つまり、既にこの建物に侵入されているということ。

その事実気付くと、言い様のない悪寒が彼女を襲う。

本能が叫ぶのだ、直ぐにここから逃げろ、と。

だが、どういうわけか最上階に設けられた執務室。その座り心地の良い椅子から立ち上がれずにいた。

手が震える、足がすくむ、腰が抜ける。

兎に角、立ち上がれない。

不意に執務室の扉が叩かれた。

特に特筆することもない、平凡な三回のノック。

答えようと口を開く。しかし、口はカチカチと歯が打ち合うばかりで言葉はでない。

扉は、家主の返答も聞かずにノブが捻られ、ゆっくりと押し開かれた。

「っ!？」

瞬間、濃密な血の臭いが執務室に侵入しルミューズの鼻孔を刺激した。

「ヨオ マタセタナ」

片言の機械音声が部屋に木霊する。

両開きの扉が片方だけ開かれ、姿を見せたのはダークスーツに身を包み、黒い革手袋を着けた男。顔は仮面が覆っており、ルミューズからは見ることが出来ない。

問題なのは、彼の両手だ。右手には、黒い刀身を持つ一振りの機械チックな見た目をした刀が握られており、左手には赤く液体の滴る毛の塊のようなモノが握られている。

「ミヤゲ ダ ウケトレ」

男の左手が振るわれ、ルミューズの目の前にナニかが転がる。

それは、人の頭部であった。眼鏡を掛けた金髪の女の頭部。

ルミューズには見覚えがあった。それもその筈、彼女の秘書を務めていた女性だ。

彼女も計画に荷担しており、千冬とまではいかなくとも、体術に秀でた面があった。

だが、首を放った男の体には傷どころか、汚れ一つも見受けられない。強いてあげれば、真っ白な仮面に跳ねた血の痕か。

「な、何で……………」

「ア?」

「何でこんな……………」

「シゴト ダ」

男は、何のこともないかのように、仰々しく両手を持ち上げると機械音声で語る。

「タノマレタ オマエラ ジャマ コロシ リヨウシヨウ」

言いながら、彼が懐から取り出したのは手の平大の一枚のカードだ。

「マーダーライセンス ダ」

マーダーライセンス。殺人免許証。裏でしか回らない代物であり、仮に捕まった際にもコレ一枚で無罪釈放だ。

国家間も自由に行き交うことが出来、その際には専用機が手配される。

コレが発行されたということは、即ち国がその殺しを認めた事にならない。

ルミューズは悟る、自分達は切られたのだと。恐らく何処かから計画が漏れ、その際のスケープゴートにされたのだと理解した。

だが、怒っても哀しんでも、彼女に何かが出来るわけではない。

彼女の適性はCランク。代表候補生にすら名も挙がらない、一般女性Aでしかなかった。

というよりも、そもそもの話女性権利団体でマトモに戦えるものなど一握り居るか居ないかと言った所なのだ。

彼女等の武器は、数と権力、そして煽動能力であった。

ここで注目すべきは、その中に武力が入らない点。

当然だ。彼女たちの頼みの綱はISのみ。それこそ国家代表等でも無ければ、武力など一般人レベル。下手したら下回るかもしれない。

だからこそその権力と数なのだが、それが通用しない圧倒的な暴力にはやはり、弱かった。

何故こうなったのか。ルミューズには分からない。

ただ一つハッキリしているのは、

「クビ ヨコセ」

自分がここで死ぬ、ということだ。

／

噴水のように血の吹き出す目の前の、死体を見ながら、仮面の男、暮人はため息をついていた。

せめて、ISとまでは行かずとも特殊部隊擬き位ならば出てくると思っていた。

しかし、現実には雑魚ばかり。銃を撃つてもマトモに当たらず、近接戦等お話にもならない。

ミスったか、等と考えながら、暮人は質の良いカーペットの廊下を歩む。

時折、ズチュリ、と粘性な音が響くが彼の足を止めるほどのモノではない。

まだ、仕事は終わっていないのだから。

／

女性権利団体のフランス本部が落ちて一時間も経っていない。

だが、デュノア社に居た女権団のメンバーたちは異変に気付き動きを見せていた。

連絡がつかなかったからだ。かといって戻るわけではない。

否、それは正確ではない。

戻れない、という方が正しいか。

「何なのよ………何なのよアンタ!!!」

フランス第2世代ラファール・リヴァイヴを纏う女は叫ぶ。

彼女の前には死神が立っていた。

ダークスーツ姿の仮面を着けた死神だ。

普通の襲撃者ならば、彼女ともう一人だけで十分に対応できる。I Sの前に、生身の肉壁を幾ら用意しても鴨撃ち程度にしかならないからだ。

しかし、目の前の男は違う。

その証拠として彼女の相棒は、少し後方でI Sを纏ったまま、袈裟斬りに真っ二つにされた。

シールドエネルギーも、絶対防御も関係無い。況してや装甲など紙屑扱い。

彼女達は知るはずもないが、猿叫と呼ばれる圧からの一太刀は如何なる剣豪でも躲せと呼ばれるモノなのだ。

因みに、彼の持つ剣は何でも斬れるとかそんなものではなく、刀身が欠けても自動的に修復されるというものだ。

これは、携行性を重視した上での装備。刀のように鞘がないため、

スーツ姿でも目立たず持ち運べる。

もつとも、彼が貸し出されたISを未だに持っていれば量子変換して、どんな武器でも持ち運べるのだが。

まあ、今は目の前の事だ。既にスーツ男は、必殺の蜻蛉をとっている。因みに、彼の好みの構えで行くと、この体勢から切っ先を背中へと落とし込み柄頭が前方斜め上を見るような形になる。

蜻蛉でも可能なのだが、これは単なる振り下ろしではなく、兜割りを狙うための構えだ。

その威力は、分厚い鉄板も一太刀で寸断してみせる。それを人体に食らわせれば、どうなるか。

「あ」

警戒していた筈だ。ハイパーセンサーも、確りと動いていた。

だが、気付けば剣の間合いに侵入されており、目の前には剣を振り落とした姿の男の姿があった。

それが、彼女の最期の記憶。

独特の粘性な音が響き、脳天唐竹割りの真つ二つ。グロい断面を晒しながら、彼を避けるように前へと倒れた。ラファールが格納されな
いのは、コアのギリギリまで破壊された為だろう。

契約主は、殺しは認めしたが、ISの喪失は認めなかった。そこを配慮しての、仕事も狂人には余裕の事。血に飲まれるそこの殺人鬼と一緒にしてはいけない。

「サアテ シャチヨウニ アイニ イコウ」

クスクス、ケタケタ、と彼は嗤う。

その赤くも黒い足跡は真つ直ぐに目的地へと向かうのであった。

／

『終わったかしら?』

「おお、今さっきな。話もつけた、撃滅終了だ」

『そう——————そういえば、入金はどうするのかしら?口座、無いわよね?』

「無いな。俺らは、共通財産みたいにそこら辺に放置してるし。必要な分は、適当に持ってくのが俺達だ」

『成る程ね。それじゃあどうする?』

「適当なトランクにでも入れといてくれ。今度帰省するときを持ってく」

『分かったわ。部屋に置いとくけど良いのね?』

「別に盗られても困らねえし、構わねえよ」

暫く会話は続き、やがて切れる。

通話を切った暮人は端末を懐へと収めると、仮面を外して後ろを振り返った。

「待たせて悪かったな、社長さん」

ヘラリ、と笑った彼は重厚な執務机に腰掛け剣の切っ先をカーペットの床に突き立て、両手をその柄頭の上に置いていた。

異常なのは、その刀身から今も乾ききっていない赤い滴が流れ落ちていた点。

「な、何が目的だ」

「なあに、大した事じゃないさ。こいつを見てもらおうか」

彼が懐より取り出したのは、一枚のコンパクトディスク。

「ま、俺も詳しくは知らない。商人じゃないんでな」

カラカラと笑う彼。

だが、その姿は常人からして恐怖心を煽るモノでしかない、そんな笑み。

「まあ、よく考えてくれや」

その一言が、死刑宣告に聞こえたど、後に社長は語る。

二拾二

島津の名前は、裏で有名。その要因は、主に殺戮能力に関してのものだ。

只々、純粹に、異常なほどに、強い。

地上限定だが、生身でISに勝てるほど、人斬りを極めた人種が彼等だからだ。

「はじめまして、島津暮人君」

「……………おう」

場所はフランス。パリに存在する極々一般的なカフェの一席。

向かい合うように座るのは、一組の男女だ。

片やウェーブのかかった豊かな金髪の美女、片や黒髪に目付きの悪い少年。

一仕事終えた暮人であったが、彼は未だにフランスにいる。

一つは、滅多に来れない場所に無料で来れた為。

もう一つは、目の前の彼女が原因だ。

「あら、ご機嫌斜めね」

「抜かせ。仕事中から見てただろうが」

「それなのに、仮面を取ったのかしら？」

「最初から『知ってた』んじゃないのか？」

「ふふっ、どうかしらね」

女は笑うが、その目は欠片も笑ってはいない。

彼女には人としての暖かさと言うべきモノが、感じられない。

普通ならばお近づきになどなりたくもない相手だが、他人への関心の薄い場合は別だろう。

「で？三日も見張って今更接触した理由はなんだ？」

「もう少し会話を楽しまないの？」

「生憎と、俺は会話よりも食い気だ。どうせなら、フランスじゃなくてイタリヤに行きたい所なんだがな」

「貴方、学生でしょう？」

「必要な知識を得れば良いのさ。俺達は、剣を振ればどうでも良

い」

「そう言い切った暮人。彼も含めて、彼の一家は人殺しの人でなし。それは、狂気とも言える衝動だ。」

「……………良い目よ、島津暮人君。流石は、女性権利団体のフランス本部を一人で潰して、あげくデュノア社に乗り込んで膿を排除しただけはあるわね」

「ご託はいい。いい加減本題に入ってくれないか？」

「本当に、せっかちなねえ。まるであの子みたい」

クスクスと笑う女。だが、瞬きの間にその笑みは消える。

彼女は、妖艶に足を組んだ。たったそれだけの動作で、濃密な色気を感じさせる。

「私達の、〃同僚〃にならないかしら？」

そう、切り出した。

もしもコレが学園で、切り出したのが教師陣や生徒ならばノータイムで暮人も断った事だろう。

しかし、今回は相手が違う。

「同僚、ね。アンタらが何者か、聞くべきか？」

「名乗らなくても、分かっているんじゃないかしら？」

「いや、今回ばかりはアンタの口から聞いときたいな」

何となくだが、暮人は目の前の女がある意味で自分と似た狂った相手だと感じていた。

「そう。なら、名乗りましょう。私はスコール、スコール・ミューゼル。亡国機業で幹部を務めてるわ」

「てつきり、そっちの計画を邪魔した俺を消しに来たかと思ったんだが？」

「剣一振りでISを無力化する貴方相手に一人で会いに来るわけないでしょ？」

「んじゃ、その奴はアンタの連れって訳だ」

特別旨くも不味くもないコーヒーを啜った暮人が示すのは、この席より若干奥にあたる一人の女性。

ロングの髪に、目付きの悪い女性だ。頬杖をついており、反対の手

はテーブルの上に置かれ、指で何度も天板を叩いている。

「ええ、そうね。私の恋人なのよ？」

「……………そうか」

珍しくも、暮人の頬がひきつる。

別段、昨今の世の中ならば同性愛も不思議ではない。彼自身も、LGBTに偏見があるわけでもない。

ただ、趣味は悪いな、と思ったり思わなかったり。

「それで？返事を聞かせてくれる？」

「亡国機業、ねえ……………殺れるのか？」

「場合によりけり、ね。実働部隊に入れば、貴方は前線配置になるでしよ」

「ふーん」

スコールから見ても、目の前の相手は心情を読みづらい。

それは、単純な話、世界的に絶滅危惧種レベルのレアだからだ。

彼女とて、通り雨と言われるような周りへの影響を与えるような存在だ。更に、肉体を機械へと置き換え、常人とは比べ物にならない強靱さを誇っている。妖艶な見た目に騙されて殴り殺される可能性すらあるのだ。

「それじゃあ——」

／

欧州への海外旅行を終えて日本に帰国すると、覚える感想としては、湿気が多いことが挙げられるかもしれない。

ついでに、人も多い。人口密度が高く、更に人々が忙しく歩き回ることから、息苦しさも覚えるだろう。

「隠居か……………ま、するなら海外が良いか」

ISの出現から昨今の世界での共通語は日本語だ。

自由の国等がISの説明書を英語にしると請求したが、開発者である天災が突っぱねた故の結果だった。

だが、そのお陰で語学に明るくない暮人は、隠居する場合の候補と

して海外を挙げる事が出来ていた。物価の安い東南アジアなどい
いかもしれない。

日本に帰ってきた暮人は、そのまま真っ直ぐにIS学園へと向かう
ことになる。

バックレても良かったのかもしれないが、彼の行く場所など実家位
しかない。

ならば観光とも思わなくもないが、生憎と手持ちも殆んど無かつ
た。

九州のくんだりまで行くような額ではなく、ギリギリ学園に戻る
程度。

こんなことならば、もつと持っておけばと後悔するが、此の分フラ
ンスで豪遊してきた為に致し方なし。

そんなこんなで帰ってきた暮人だったが、部屋で一息付く間もな
く、それどころかスーツを脱ぐ暇すらなく、アリーナへと連れてこら
れていた。

「……………会長さんよお、俺は一仕事終えたばかりなんだが？」

「そう怖い顔しないでちょうだい。今回の島津くんの仕事は、もしも
の時の備えよ」

「あ？」

「クラス対抗戦の時みたいに、乱入があるかもしれないじゃない。ま
あ、保険よ」

「アンタが出れば良いだろ」

「あら、お姉さんに戦わせるの？」

「国家代表だろうか」

観客席最上階に通じる通路の暗がりにて、暮人と楯無の二人の姿は
あった。

見下ろす先では、今まさに学年別タッグマッチトーナメント一回
戦、一夏&シャルル対ラウラ&箒の試合が行われようとしている。

注目の一戦だ。しかし、全員が全員注目している訳ではない。

少なくとも、上二人は注目していなかった。

「久し振りの狩りはどうだったの？」

「まあまあ、だな。大して強くはなかったけども、ストレス発散にはなった」

「そう」

報道規制されているが、フランス女権団本部の潰滅は、世界でも知る人ぞ知るニュースとなっていた。

そして同時に、彼女達を恐れ戦かせる事となる。

フランスで後ろ暗いことが行われていたことは、他の本部も周知の事であったからだ。そんな彼女等が、文字通り全滅。更に相手は、ISすらも歯牙にも掛けず殺し、壊している。

それ即ち、自分達の特権領域を破られているに相違無い。

「ずいぶんと、慌ただしいみたいよ。正体不明の敵だから、かしらね」

「正体不明、ねえ。仮面一個でここまで変わるか？」

「刀一振りですIS一機潰されるなんて誰も思わないわよ」

良いでしょ、それ。と楯無は暮人が隠し持っている武装を引き合いに出してきた。

彼の振るっていた剣は、ISの技術が流用されている。

刀身は、量子変換であり、刃の再生機能は打鉄の物理シールドの修復機能を当て嵌めたもの。

強度もさることながら、再生するため実質切れ味が落ちることもない。

「……………にしても、暇だな」

「あら、大きな欠伸。お姉さんが膝枕してあげようか？」

「え、別に要らねえけど？砂利の上で寝ることもあるし」

「貴方の体、どうなってるのかしら」

臥薪嘗胆も真つ青な砂利の布団。チクチク痛いこと請け合いだろう。

だが、その拷問のような場所も理に叶った選択ではあった。

近くには川があり、砂利はどれだけ気を付けても踏めば音が鳴る。

それによって襲撃者感知することが容易になるのだ。

暮人は川原を拠点とすることで『ドキッ！刺客だらけのサバイバル生活！自分以外を全滅させねば終われません！』という、名称の

ファンキーさを一ミリも反映していない殺伐家族イベントを乗りきってきた。因みに命名は、彼の母である。

そんな緊張感の欠片もない二人であるが、眼下のアリーナではまああの激戦が続いていた。

本人達は至って真面目だ。しかし、ラウラとシャルルが抜きん出しており、タッグマッチということも相俟って残りの二人が目立つ目立つ。

即席のコンビネーションで言えば、一夏とシャルルも悪くないだろう。

だが、見る人が見れば分かる。このコンビネーションはあくまでもシャルルありきだ。

更に言うと、この場で一番善戦しているのは、ただ一人訓練機である筈だろう。

暮人に負けてから、彼女は剣を振るってきた。

二の太刀要らずとはいかないが、その剣技は正に流水の如し。

シャルルの銃撃に対しても剣だけに固執せず、実体シールドを織り混ぜてダメージを削るといふ堅実な戦法を採っていた。

同じく近接である一夏程の派手さはないが、確かな技術を感じさせる。

学生レベルならば十分見物になる試合。

しかし、それも終わりを告げた。

一瞬の隙について、一夏とシャルルがスイッチ、筈は押さえられ不意打ちを受けたラウラの腹部にラファール武装の一つ、盾殺しが炸裂。

パイルバンカーは、言わば杭打ち機だ。その威力は絶対防御を嘲笑うように衝撃を貫通させ、ラウラの体をくの字にへし折る。

それが二発、三発と続き、彼女の心は折れかけた。

だが、そこで思い出す。あの強い背中を。憧れた相手の背中を。

「アアアアアアアアアアアアッツツ!!!」

紫電が走り、黒がドロリと溶けていく。

明らかな異常事態。

「行つてくれる？」

「その為に置いてんだろ」

暮人は後ろ手に手を振ると、懐から白い仮面を取り出して顔に取り付けた。

何やら、アリーナでは一夏が騒いでいるが、狂人には関係無い。

観客席の人々は避難誘導に従いながら、それを見た。

黒の上着をはためかせ、掲げられた両手には一振りの黒い日本刀。機械のような見た目だ。

その顔には、表情を一切表に出すことの無い真つ白な面が付けられている。

死神は、真つ直ぐにアリーナへと落ちていく。そして、上段に構えた剣を障壁へと叩きつけていた。

競技用とはいえISの砲撃も防ぐ障壁だ。零落白夜のようにシールドエネルギーを無効化する効果でも無ければ、人力で抜くことなどまず不可能。

その筈であった。

まるで、ガラス細工。障壁の一部が切り開かれ、死神はアリーナへの侵入を成功した。

「サテ アイテ シテヤル」

死神は、真つ直ぐに異形と化したラウラの前へと歩を進め、数メートル前でその足を止めた。

異形、その見た目は、どこか世界最強を思わせる。それに加え、その剣の振りは彼女と同様、更に加えて剣狂いの鋭さを内包していた。

この真似が、未熟者には許せない。

だが、死神にとっては些事だ。真似であろうと何だろうと、強ければ、良い。

それも擬似的とはいえ、世界最強を相手取れるのだ。仮面の下では、チエシヤ猫のように口角ががり上がり、その目は瞳孔が開いている。

死神と贗作の戦いが始まろうとしていた。

二拾三

死闘の直前、アリーナ管制室では真耶が狼狽え、千冬が渋い顔をしていた。

「ど、どうしましょう先輩……………あの人はいつたい……………」

「……………さあ、な。だが、教師陣の突撃は見送らせてくれ」

「で、でも、生徒が……………」

「あの男は、障壁を破って入り込んだんだぞ？絶対防御やシールドエネルギーを宛にしている者では、カウンターで斬られかねん」

千冬の懸念。そして、ある程度絞られた正体から考え、彼女は引かせることを決めた。

少なくとも、今の状態は正体不明の男が、生徒を守る位置に立っており、敵と向かい合っている。

もつとも、状況的に宜しくないのは確かだ。

避難誘導が始まっているとはいえ、彼の登場は派手すぎた。

今のところ、彼の持つ刀が特別製だと周りは考えている事だろう。

しかし、正体に心当たりのある千冬は、戦い始めればそれも変わると考えていた。

正に胃痛案件。世界最強も内臓へのストレスにまで耐性は無いらしい。

「……………死人が出なければ、御の字か」

ボソツと呟かれた物騒な言葉は、誰にも聞かれることはなかった。

／

障壁の外では、騒ぐ者達が多い中、アリーナ内部では沈黙が支配していた。

向かい合う死神と贗作、そして死神の後ろに庇われる形の3人という構図だ。

明らかに異質なのは、前者。溶けたISが操縦者を包み込み姿を変えた者と、スーツ、仮面、刀という明らかに色物な男。

だが、彼と彼女等は声をかけられない。

色物な見た目に反して、その全身から発せられる殺気が半端ではなかった。

それは、彼等が行っていた全力の試合がおままごとと思えるほどのもの。

当たり前だ。ルールと装備に守られ、安全を考慮した試合と、一瞬の油断が生死を分ける死合では修羅場の度合いが違いすぎる。

男と彼らの間に横たわるのが、その差だ。

そんな周りなど知らんと言うように、彼は剣を構えた。

一応正体を隠しているのだから一般的な正眼の構えである。

蜻蛉など見せた暁には、面倒な追求が彼を待っている。

近い構えならば、八相や上段等もあるのだがせつかくの相手だ。楽しまなければ損だろう。

彼は偽物を肯定する。

世間一般では、真似ばかりというのは忌避されがちだ。

しかし、忘れてはいないだろうか。人間誰しも、才能に関係無く始まりは真似から始まることを。

それが勉強であれ、スポーツであれ、武術であれ、始まりは真似することだ。

真似て、覚えて、理解する。それが全て。そこから、発展させるのが天才であり、反復するのが凡才だ。

どちらであれ、その過程で真似した相手に近付きたいと思うのは間違いではない。むしろ当然とも言える。

結果として、贋作、偽物と揶揄され、非難されようとも、手にした力は本物だ。

彼にとつては、力の得た過程や方法などはどうでも良い。

ただひたすらに強くありさえすれば、それで良い。

「ブチコロス」

黒が駆け抜ける。

／

火花が散った。何度も何度も舞い散り、散って、再び咲き乱れる。特筆すべきは、彼の方か。

相手はISだ。立ち上がれば、成人男性も見上げるほどに大きい。そんな相手が近接武器である剣などを振るえば、自然と振り下ろす姿勢となるだろう。

「カカカカツ！ヤルジャネエカヨ」

態と、相手の攻撃を受け止めながら死神は機械音声で笑っていた。振り下ろしには、単純な臂力だけでなく、重力や遠心力を乗せやすい。

それに加えて、今はパワーアシストによって鉄板すらも飴細工のようにネジ切れる力を発揮できる。

つまり、一人が受け止められるような一撃では、本来ならば無い。だが、彼は違う。

全身を柔らかく使い衝撃を緩和、刀身の反りを利用してインパクトの瞬間ズラす事により、緩和する衝撃を更に削っていた。

常の彼を知る者からすれば、似合わない柔の剣だ。

そもそも、剣狂いが一撃必殺の剛剣のみで目指すべき頂きに辿り着ける筈もない。

例えば、ベースとなつている「ジゲン」流とて初太刀を外せ、というのが印象的すぎて他は素人、等という印象が持たれている。

それは、誤りだ。二太刀、三太刀と次に繋げる手段も確かに存在しており、確かな技がそこにある。

居合い抜き等もその一つ。

確かに一を極めることは、重要だ。しかし、その過程でその一つに固執する事は宜しくない。

時には別の視点を混ぜていかねば、煮詰まってしまう。そうなれば、高みに登れるであろう逸材も腐ってしまうというもの。

彼、暮人も同じこと。一撃必殺の剛剣をベースに脱力を覚え、柔剣の要素を組み込むことにより、爆発的に一振りの破壊力が増した質だ。

「ソロソロ イイカ？」

「!?」

何度も何度も、剣を振り下ろしていた異形、VTシステムはシステムでありながら目の前の存在が急激に大きくなったかのような圧迫感を覚える。

同時に、先程まで一方的に振り下ろすだけであった剣が徐々に跳ね上げられていく。

そして初めて、彼から一步前へと踏み出した。距離を詰めてから、前にも後ろにも行かなかった彼から仕掛けた形だ。

その内心としては、百近く受け止めてハンデもやったんだから、良いだろう?というもの。

贗作とはいえ世界最強の太刀が、弾かれる。

どの角度から振り下ろしても弾かれ、威力を変えても意味がない。

一振りする度に、無駄、と叩き返される。

訳がわからない。

相手は生身であり、スキャンすれば筋密度や骨の強度が異常ではあるが人間だ。

だが、打ち勝てない。手も足もでない。

それどころか、押し込まれる始末だ。

VTシステム内には、山のようなエラーが発生しており、その結果一気に機体の動きが悪くなっていく。

その一瞬を彼は逃さない。

「シマイ ダ」

一瞬で四本の斬撃が駆け抜け、中のラウラを傷付けぬように両手足が斬り飛ばされ、柄頭によって顎をカチ上げられた。

埃を舞いあげ、機体は仰向けに倒れる。

本来ならば、ヘドロのような装甲がダメージを食らう先から修復されていくのだが、今ではその機能も、エラーによって死んでいた。

最初から決まっていたことだ。ただ、早いか遅いか、それだけの違いでしかない。

ここが学園ではなく、外であり、相手が殺しに来た敵ならば、最初

の一太刀でケリがついていたことだろう。

「マアマア タノシカッタナ」

狂人の欲を満たすためだけの茶番。

決められたシナリオを完走した演者に与えられるのは——
無力感だけであった。

／

茶番劇の行われた、その日の夜。甘味を補充し、昼寝をした暮人は海の側へとやって来ていた。

崖の天辺に腰を下ろし、何をするでもなく海をボーッと眺める。

既にスーツではなく、安物のジャージ姿となった彼は、手元に得物も持つてはいない。

「こんな時間に、何をしている」

「それはお互い様じゃねえですかね」

彼の背後に現れるのは、スーツ姿の千冬であった。その表情は、かなり厳しい。

「島津……………いや、死神、と呼ぶべきか？」

「……………はて、何の事やら」

「惚けるなよ。フランスの件もお前の仕業だろう？」

「フランス？俺は単にずる休みしてる不良生徒っすよ」

惚ける口調の暮人。どうやら真面目に答える気は欠片もないらしい。

別段隠している事でもないが、面倒を背負い込む気は更々無いからだ。

「……………私としても、殺人鬼を野放しにはしたくないんだがな」

「だったら掛かってくれれば良いでしょう？牙の抜けた虎ほど狩りやすい相手はいませんかね」

覇気の強くなる千冬に対して、暮人は余裕を崩さない。

彼としては、殺し合いになっても構わないと本気で思っていた。

なんせ、VTシステムは肩透かし、偽物にしたってもう少し完成度

が欲しいと文句を言いたくなるレベルであった為だ。

鈍っていることを加味しても、恐らく最強クラス。

それを思うだけ血が滾る。やはり彼も剣狂いにして、戦闘狂の一族なのだ。

「お前は、その手を汚すことに躊躇いはないのか？」

チリチリと肌を焦がすような殺気を放ち始めた目の前の背中に、千冬は思わず問い掛ける。

殺してやる、と怒りを持ったことは彼女にもある。しかし、その前に理性がストップをかけるのが人間というものだ。

普通は。

「別に、何とも。弱いから敗けて、結果死ぬ。それだけっすから」

狂人には関係無い。

人が生まれ、生きて、死ぬ。その過程に、彼らは魅力を感じない。求めるのは、生き死にの掛かった一瞬に煌めくやり取りのみ。

どうしようもない程に単純で、そしてどうやっても取り返しのつかない瞬間にこそ、充実感を得られる。

そんな狂人の理に、千冬は寒気が背中を通り抜ける感覚を覚えた。

これは、違う。そう本能的に理解した、いや、理解させられた。

自分も大概「オカシイ」と自覚のある彼女ですら、この狂気は理解の外。

何故なら、彼女は人間だから。理性ある、人間、だからだ。

暮人を含めて、彼の家は違う。獣で、餓狼だ。

戦いと血に飢えた野獣。

そんな相手に、人間の理を説いた所で意味は無い。

「相手、してくれませう？」

問うた彼の振り向いた横顔には、口角が裂けたのかと思えるほどに好戦的な笑みが張り付いているのだった。

二拾四

イベントというイベントが尽く潰れるIS学園。

当事者たちこそ必死に終結させ死闘のようにも思えるが、第三者からはそうも行かない。

イベントは潰れるもの。そんな認識が、彼女達には芽生えつつある。

その芽は、臨海学校にも向けられていた。

二泊三日の日程であり、初日は自由時間、二日目はIS実習となっている。

因みに、これが終わると、赤点60の期末試験が待っていたりする。そんなイベントを控えた週末。多くの生徒は、その日に備えて新品の水着など、買い物に出掛けている者が多い。

一夏と彼に惚れている面々も、含まれていた。

「…………釣れねえ」

そんな暑い日。頭には麦わら帽子を被り、白いシャツに、短パン、サングラスの暮人は海の近くで釣糸を垂らしていた。

リールが付いておらず、所謂のベ竿と呼ばれるもので、扱いが少々難しい。

もつとも、今回は釣果を得るためのものではなく、単純な暇潰しだ。そんなことをする暇があれば、剣を振れ、とも思われそうだが、これも立派な修行のひとつ。

釣りは、忍耐と集中力、反射神経、洞察力の訓練に向いているのだ。まず、釣れるまでマトモに動けない。そして、竿を握る手や、浮きの沈みも見逃すわけにはいかない。

そして、タイミングを見計らって竿を引かねばのベ竿は釣れない。更に、魚の位置を見極めねば何もない場所に針を打ち込むことになる。

まあ、七面倒な事をペラペラ連ねてはみたものの、一番の理由は精神的な余裕のためだ。

集中だ何だと、言うが水面をゆらゆらと揺れる浮きを眺めてぼんや

りと過ぐすと、思いの外早く時間は過ぎていく。
「……………む」

右手で持っていた竿がほんの少しだけしなる。
瞬間、竿は彼の頭上へと振り上げられていた。

パシヤリ、と水面が跳ねて揚がってくるのは銀の影。この季節旬の、鱈である。

手元へと振り子のようにやって来た獲物を手際よく針から外し、傍らの氷を山ほど入れ、少量の海水を貯めた、かなり大きめのクーラーボックスへとぶちこむ。この際、なるべく魚に素手で振れないことが重要だ。

顕著なのは、深海魚。彼等は、人肌の熱でも火傷する。

針に餌を付け直して再び投擲。

実に穏やかな一日だ。

「……………おてるが、生で食うのはお勧めしないぞ？」

不意に、暮人はそんなことを呟く。

この場には、彼以外に人影は見えない。更に、彼自身も顔を前に固定したままであるため何故そんなことを呟いたのか分からない。

「へえー……………気付くんだ。凡人の癖に」

「人が確かにそこに『居る』なら分からねえわけねえだろ」

ジジツ、と空間にノイズが走り、透明な空間に七色以上の色が出る。

その波が収まると、現れるのは狂った兎の大天災、篠ノ之束であった。

「俺に用事か？」

「まあねえ……………凡人、役に立てよ」

「説明がなきゃ分からねえな。生憎と、凡人なもんで」

刺の在る口調の束に対して、暮人は余裕な態度を崩さない。

舐めているとか、そんなことではなく単に興味がないからだ。

「ホント、ムカつく」

「一々目くじら立てるなよ、天災。子供の戯れ言位聞き流さなきゃな」

「ムカつく」

彼の口は、皮肉を吐き出すために回り続ける。

本来ならば何をしでかすか分からない束にこんな態度を取り続けられる者など早々いない。だが、彼女の存在に対して実害が殆ど無く、更にもしもの時に退ける力があるなら話は別だ。

天災は、人の身で抗えないからこそ、天災だ。ならば、人の身で抗えるものには天災足り得ない。

「凡人の癖に生意気」

「お前から見れば、この世の人間全てが凡人だろうが」

「ちが——」

「違わないさ、天災。あんたが認識する3人、織斑先生の身体能力はスゴいが、少々頭が足りん。篠ノ之は努力してるが、まだ人だ。織斑は………まあ、今後に期待か」

これは、暮人の主観だ。狂人であるが故に、常人か否かを判別できる。

彼から見れば、大抵の相手は常人足り得た。逆に彼から見ても狂人は、数えるほどにしか居ない。

例えば、通り雨の女。例えば、彼の家族。

真の狂人とは、理性と社交性という皮を被り、傍目には常人と何ら変わらないモノなのだ。

何故なら彼等は、自身が異物であり、バレれば排斥されることを理解しているから。

故に狂人は、バレないように演技している。

そこから考えると、束も狂人足り得ないという事になる。

そもそも彼女は、自分が心許した相手しか認識しないとされているが、それは単にコミュ障なだけだ。

なんせその始まりは、周りが理解できない、ではなく、周りが理解してくれない、という部分からきている。

つまり、最初に周囲に対して諦めたのは彼女の方なのだ。

その諦めが、他人への棘へと変わり。その棘が周りに刺さることで、更に周囲を遠ざける。謂わば防衛本能にも近い。

暮人から見れば、彼女は駄々をこねる子供に見えた。

伸ばされた手を弾き、一人喚いて縮こまった小さな子供。

「まあ、なんだ。俺は手を出さねえよ。のんびりバカンスでも楽しませてもらおうさ」

ヘラリと彼は笑うと、釣竿を一息に引き揚げた。

釣果はまたしても、鱈だ。今回は、青ではなく白の強いタイプである。

強い日差しを受けて、その体表はキラキラと輝くのであった。